

金光教土佐高岡教会先代

野村トヨ師の生涯

野村登茂子 著





(▲野村トヨ師【故野村真道豊明姫之靈神】)

# 金光教土佐高岡教会先代 野村トヨ師の生涯

## ○目次

- ・刊行の言葉
- ・神様を知らない時代
- (一) 出生と岡元家
- (二) 幼少時代
- (三) 養家での生活
- (四) 生家に帰りの少女時代
- (五) 新婚時代の生活
- (六) 二十歳頃よりの生活
- ・御神縁を頂く
- (一) 二十四歳の大病
- (二) 信者としての信心生活
- (三) 教会修行
- (四) 兄の元に帰る
- (五) 金光教南宇和教会へ入る
- ・金光教学院での生活
- ・金光教南宇和教会での御用
- ・高知教会での修行生活

- 
- ・高岡町での布教
  - ・布教当初の生活
  - ・祈り助けられて行く信奉者
  - ・養女をもらわれる、学院入学と病氣
  - ・親先生、母、主人と別れられる(死別)
  - ・霊様となられ、ご夫婦に
  - ・養母との別れ
  - ・御本部参拝途中での出来事
  - ・娘の結婚
  - ・孫誕生
  - ・御造営
  - ・親先生、最後の御本部参拝
  - ・親先生と最後の語り御用
  - ・親先生、母とのお別れ
  - ・親先生の御葬儀
  - ・霊の神となられてからも
  - ・あとがき

著者 野村登茂子

## 刊行の言葉

私は今日までも、先代野村トヨ親先生（以下は先代親先生）の御生涯の中の、数々の御教えや、ことがら、人間関係のあらわれ方、御歌など、いろいろのことを、年記祭などに当たる時に書かせて頂いてきました。今年、先代親先生が御布教始められてより、土佐高岡教会も満四十五年の記念祭の年に当たり、又、土佐布教百年祭の意義深い記念の年柄でもあり、さらに、来年は先代野村トヨ親先生が御帰幽になられてより、満二十年の年記祭をお仕えさせて頂くようになります。

月日の経つのは早いものと思えますと共に、私の心は何か又、改めて御用させて頂かねばならぬのではないかと思わさせて頂いた時、次男、清治が、金光教学院を今年おかげを頂き、満二十歳に成人させて頂き、土佐高岡教会で御用を供にさせて頂きたいとの願いもあり、その御用始めにパソコンで活字に作成してくれるということになりましたので、私が原稿を書かせて頂き、先代野村トヨ親先生の御生涯を作成させて頂くはこびにならせて頂きました。

先代親先生は、私にとりましては、信心の師であり、御神縁を頂かせて頂いてからの母でありました。

書かせて頂く都合上、御幼少の時、御信者の時代、金光教の教師として、土佐高岡教会の教会長

として御用されるようになったからのこと、又、私共、親子との関わりあいのところ、いろいろ書かせて頂きたいと思えますが、その時、その時によつて呼び名を変えさせて頂いたり、中に出てこられる人々の中で、名前を出させて頂く人、仮名で書かせて頂く人、いろいろあると思えますが、御了承願いたいと思えます。

先代親先生の御生涯の内、私のはかり知らないところも数多くありましたが、私の聞かせて頂いたこと、思わせて頂いたこと、いろいろ書かせて頂きたいと思えますが、書き足りないところは、お詫び申し上げます。

神様、金光様、先代親先生に御取次御願ひ申し上げ御用させて頂けるようになりますのも、私共親子に取りまして、神様、金光様、親先生の深い思し召しがあり、意義深いことではないかと、ありがたく思わせて頂き作成させて頂きたいと思えます。

後々の人々に、土佐高岡教会、先代野村トヨ親先生のごことが、少しでもおわかり頂ければ、ありがたいたことと思えます。

よろしくお願い申し上げます。  
ありがとうございました。

一九九一年（平成三年）十月二十二日

野村 登茂子

## 神様を知らない時代 (一) 出生と岡元家

先代野村トヨ親先生は、明治三十六年三月二十一日、愛媛県南宇和郡城辺町小西町に住む、岡元仁太郎（おかもとにたろう）を父とし、クマを母としてその五女として産声をあげられました。

岡元家は、祖父の時代は宇和島の城主に仕える刀鍛冶であったとのことで、江戸へ城主が出

## (二) 幼少時代

幼少の頃のトヨは色白で丸顔の大変可愛い子供で、親思いの素直な心で、皆に思いやりのある心の優しい子供であったとのことでした。

トヨが九歳になったある日のこと、ふらりと一人の男の人が岡元家に現われ、その人は、高知県の人だったということですが、父親、仁太郎に、

府の時などは、供をして行かれた家であったとのことですが、明治維新により、父仁太郎の代では野鍛冶となり、鎌や鋏を作つて家業としていたということでもあります。

トヨには、兄、姉、妹と九人も、きょうだいがいたとのことですが、父親も、大変人の良い人で、人々からも好かれ、よく

「私には子供がいないので、子供が欲しいのだが、あなたには大勢子供さんがいるようだから、どの子供さんか一人私にもらえないだろうか。」との相談をもちかけたそうでもあります。

父親、仁太郎は、大変人が良く人を疑うことを知らなかったので、子供がいないのも淋しい

子供も可愛がり、特にトヨはよく可愛がられたということですが。岡元家は、当時は、天理教の信心をしていたとのことですが、後にトヨが、命の亡きところを金光様に助けて頂き、金光教の教師として御用させて頂くようになり、金光教に改式されたとのことですが。

事であろう、可哀相な人だと思ひ、その人の言われることが本当だと信じて、子供の中でもトヨが一番親思いの心の優しい子供だから、この子供をあげたらと思ひ、あまり相手の人を詳しく調べることもせず、トヨをその人の養女にあげることにして、トヨは早速にその人につれられ、住み慣れた家、両親、きょうだ

いと別れをつげ、自分の意志も通せぬままに高知県にある養家にきたとのことでありました。

### (三) 養家での生活

トヨの来た養家は野村といい、養父になった人は、野村治三郎(のむらじさぶろう)、養母は、野村千代江(のむらちよえ)という人であったとのことですが、当時、養母であった千代江は、養父、治三郎があまりにも暴力をふるう怖い人で、家を出て行方不明になっていて、養父、治三郎と、養母、千代江の間には、実子はいないで、養家にいたのは、内縁の妻と、その人には治三郎との間に生まれた四人の子供がいたということでありました。

治三郎は、養母、千代江との縁組みにて、野村家の養子に入った人であったとのことでした。

ですから、治三郎には、内縁の妻との間に子供はいても、養母、千代江との籍に入れる訳に

無情なる悲しき運命とはいえ、これからが、トヨに淋しい、苦しい、日々が始まったのであり

ました。

はいかないので、トヨを養女にもらい、千代江との籍に入れられたとのことでありました。

千代江は行方不明になっていたので、トヨが養女として、自分の籍に入っていることを知らなかったのであります。

トヨにとっては、その日から養家での可哀相な苦労の生活が始まったのであります。

家族とはいえ、知らない養父、内縁の妻である母、きょうだいになった子供達がいる生活が始まったのですが、内縁の妻にしてみれば、我が子が四人もいるので、トヨは、本当にいらぬ、じゃまな子供だったのです。

ですから、トヨを何かにつけて、継子苛めをして、学校へ行かねばならない年がきているの

に、学校へもやらず、我が子だけを学校に行かし、トヨには、家のことを手伝わせ、食事もなくに与えず、食事の時間になると、トヨを使いに出し、用事を済ませ、トヨが帰ってくるのも道草をしていないのに、内縁の妻(以下は母親)である母親が、

「何を今頃までぐずぐずしていた、食事の時間も分らないのか、そんな者は食べることはない。」

といつて食事をさせなかったのであります。

そんな時、義理の兄になった子供が、トヨを可哀相に思い、庇ってくれたことでもあります。

食事をトヨにさせないときなど、その兄が見兼ねて、母親が

家を留守にしたような隙を見て、トヨに何か食べ物を探してくれましたのですが、母親も自分の留守に子供達が取れない様に食べ物が高い手の届かないところへ吊して行ったとのことでした。

義兄は棒を持って来て、下から突き落とし、落ちたら、トヨに早く食べるように言ってくれたそうであるが、トヨは、

「又、お母さんに叱られるから。」  
と言うと、義兄は、

「食べさせない方が悪いのだから、かまわないから早く食べ。」  
と言って食べさせてくれたとの事であるが、食べ物を突き落とした時、辺りいっぱい散らばっているところへ母親が帰って来たりすると、大変である、又叱られるのである。

叩かれる時でも、柱のところにトヨを立たし、母親が叩けば、パンパンと柱と手と両方で叩くような苛め方をされたとの事である。

それでもトヨは他人の人からいろいろの事を聞かれても、小さい乍も、賢い子供であったので、人に言えば親の恥だと思ひ、誰にも言わず一人辛抱したとのことでもあります。

又、学校に行かさないから、トヨを来さすようにとの通知があるが、それでも母親はトヨを学校に行かさなかつたとのことでもあります。

義兄は学校へ行っているので、先生が、

「どうしてトヨを学校に来させないのか。」

と聞かれるし、友達からは、「お前の親は継子苛めをしよる。」  
と言われるので、

「恥ずかしくて外も歩けん、どうして苛めるくらいなら、いらん子供をもううてくるか。」  
と言って母親に怒つたとのことであつたそうです。

又、近所の人達もトヨが苛められるのを見て、可哀相に思ひ、

食事の時に使に行かされるトヨの帰りを待って、おにぎりを作ってくれたりしていたとのことですが、トヨは、

「帰ったらお母さんが食べさしてくるから。」

と言って、もらつて食べることはせず、母親が恥をかくことを庇つたとのことでもあります。

でも人々は見かねて、  
「あなたには、実の両親がいるのだから。親の元へ帰つたらどうか。」

と言ってくれたりしたそうです。が、小さな子供故、どう行けば、家に帰れるかも分からず、又、例え分かつたとしても、両親にこのような暮らしをしていることを言えば親が心配すると思ひ、自分一人が辛抱すれば良いのだと自分に言い聞かし、辛抱していたとのことであつたそうです。が、トヨが十五歳になつた時、近所の人々がもう帰る道が分かれば、帰れるだろうと思ひ、警察

に頼んでくれ、警察は養家に分らない様に、両親を捜してくれ、警察から実の両親に伝えられ、両親もトヨがそんなに苛められて暮らしていることを始めて知り、トヨにすまなく思い、

#### (四) 生家に帰りての少女時代

生家に帰り、家族と共に暮らすようになったトヨは、六年ぶりにほっとした生活であったこととでしよう。

ある日のこと、小西町の空に初めて飛行機が飛んで来たというので、皆が一目見ようと外に走り出たときに、トヨの妹が病気で休んでいて、入口までもよう動かない病人であったが、妹はトヨに

「私も死ぬ前に一目飛行機というものを見たい。」  
と言うので、トヨは可哀相に思

い、  
「そんなに見たいのなら、姉ちゃん

父親、仁太郎がこっそり迎えに来てくれ、トヨは、父親と共に実家に帰り、又、両親やきょうだいと共に暮らすようになったこのことであつたそうですが、トヨは、行方不明の義母、千代

と言つて、妹をおぶつて飛行機を見せてあげたということがあり、妹もその時のことを大変喜んだというが、病気が全快せず、十四歳の若さでこの世を去つたという。

トヨには妹だけでなく、兄や姉に対しても思いやりのある心の優しい少女であつたという。

岡元の家は、不幸不幸せが続き、一年に三人ものきょうだいが死んでいったとのことで、その年は神祭が来ても外に出てはいけないとのことで、雨戸を下ろし、真つ暗な中で、両親も涙に暮れていたとのことで、トヨも、子供心に淋しく悲しんだと

江を可哀相に思い、籍だけは抜かず、そのまま、野村の性を名乗ることにしたとのことであります。

いう。

トヨが十六歳になった春の節句の日、姉さん達と一緒に着物を着せてもらい、姉さん達が一足先に出かけたので、トヨも早く出かけようと思ひ、畳の上を歩いていて、どうもしないのに、こけて胸の骨を折るといふ大怪我をした。

それが元でトヨは大変体が弱くなり、手を上げて棚の上の物を取るといふようなことも出来なくなり、足にも重たい木の下駄などはけかないような体になつた。

そんな体で生活するようになったトヨが、十七歳になった時、

トヨの姉に縁談があつた。

その話がまとまり、結納もすまし嫁に行く日を待っていたその姉が急な病気で死んだのである。

先方はその姉の死により、今度はトヨを嫁に欲しいと言われ、両親は困り、  
「まだ十七歳になつたばかりだし、体も病身になつたのでトヨ

## (五) 新婚時代の生活

岡本家に嫁いだトヨは髪も丸まげに結びあげて本当に可愛い幼な妻という感じがしたのとことであるが、両親や主人に嫁として妻として真心で仕えたとのことです。

婚家の両親も主人もまだ年が若いからとして、娘のように可愛がってもらい幸せな日々を暮らしていたとのことです。

その内にトヨに子供が生まれることになり両親も主人も大変喜んでくれたとのこと、トヨ

を嫁に出す気持ちはない。」

と言つて断わつたけれど、それでもかまわないからとの先方の強い願いにより、両親も断りきれなくなり、トヨは姉の身代わりのようにして、十七歳にして、同じ小西町に住む二十五歳になる岡本徳一（おかもととくいち）氏のところへ嫁入りをしたのである。

に、

「無理をしてはいかん、体を大事にしてくれ。」

と優しくいたわつてくれ、主人の父親も主人も何処へ出かけて行つても、外の人には何も買つてこなくても、トヨにだけは忘れずにおみやげを買つてきてくれるといつたようなことで、家族皆が元気な子供の生まれるのを楽しみに待つていたとのことですが、五ヶ月に入つた時、こけて子供【豊一（とよかず）】を

身は岡本徳一の妻になつたが、

籍だけは養母を思いやるトヨの願いにより、野村トヨのままであることにしたのであります。文金島田に花嫁衣装の嫁ぐ日のトヨは、大変可愛い花嫁さんだつたとのことです。

しかし、死んだ姉のことを思うと何か淋しい気持ちだつたといふことです。

流産してしまつた。主人もトヨも両親も大変残念に思つたとのことでありませぬ。

トヨは子供がそんなことになつて、後すぐ恵まれる様子もなかつたので、犬が好きであつたので、犬の種類でチンを買つて大変可愛がり、買ひ物をしに出かけるときも又何処に行くにも犬を連れて行つたとのこと。犬の好きなものを買つて食べさせ、子供のように可愛がつたとのことです。

トヨの結婚生活の内一番楽しかった時代だったと思います。

## (六) 二十歳頃よりの生活

トヨが二十歳になった時、主人、徳一の兄さんが妻と子供三人を残して病死をされたのです。

それから新婚時代トヨを大変可愛がって下さったお母さんの態度が変わられ、トヨを離婚して、徳一と兄嫁を結婚させたら孫も不幸にしなくて済むと思われ、トヨの体の弱いのは始めから承知で、それで構わないからと嫁にもらっておきながら、それを、

「弱い嫁をもらうたら一生不作だ。」

と毎日ことあるごとに言われ、トヨを苛めにかかられ、トヨが嫌になって一人で出ていくように仕向けてこられたとのことであつたが、主人、徳一はトヨに、「おふくろの言うことなど気にするな、わしにはお前という妻

がいるのだし、兄嫁と一緒にいる気は全然ないから心配することはない。」

と言ってくれたが、トヨは情の深い思いやりのある人間故、主人、徳一が姉さんと一緒になれば、子供達も幸せに成人する。

姉さん一人で三人の子供を育てることは大変な事だと思ひ、姉さんは三人の内二人は育てても、三歳になる女の子一人は他人にもらつてもらうと言われ、トヨは自分も小さいとき、人にもらわれ、苦労した事を思ひ、三歳の女の子が又、自分と同じ様な道を通るのは可哀相だと思ひ主人に、

「お母さんもあなたと姉さんと一緒にしたいと思つておられるようだから、私と別れて、姉さんと一緒になられたらどうです

か。」

と勧めたけれど、主人、徳一は、

「絶対そんな事は嫌だ。」

と言ひ張り聞かないので、トヨは、

「それなら他人にやると言う女の子を一人もらつて世話をしなきゃつたら。」

と言つたが、主人は

「それもお前に子供が生まれたとき困るから嫌だ。」

と言つて聞かなかつたとの事であつたが、トヨはそんなことはないからと言ふことで、三歳になる女の子を養女としてもらうことにし、その子供を大変可愛がつて世話をし育てたと言ふことでありました。

けれどお母さんは何かにつけてトヨに辛く当られ又、主人、徳一にもいろいろ言われるので、

主人、徳一は大阪へ行くと言って怒って家を出ていったので、姉さんは子供二人を連れて実家

## 御神縁を頂く

### (一) 二十四歳の大病

トヨが二十四歳になった時、腹膜炎になり、病気が進み、医師から今晚の命が亡いと手を離された。

丁度その頃、愛媛県南宇和郡城辺町にあった、金光教南宇和教会に御神縁を頂いて、金光教の信心をさせて頂いていた、トヨの実の姉ハルノが、トヨが病気で今晚の命の亡い事を知り、トヨに、

「金光様は有難い神様だから貴女も寝ながらでいいから、金光様助けて下さいと一心にお願いしなさい。

きつと助けて下さるから。」と教えられ、丁度その時、トヨの妹キクノが大阪へ働きに来ていたので、その妹にトヨの住ん

に帰り、トヨ達は主人、徳一の後を追って家族皆で大阪へ行つて一緒に暮らすことになったと

の事でした。

でいる近くに、金光教津守教会（こんこうきょうつもりきょうかい）があり、そこに布教されて間もない、岸上ツネ（きしがみつね）師が御用されていたので、その教会に姉トヨの代参として参拝してもらったのがトヨの金光教への御神縁であった。十七歳になるキクノが始めて金光教津守教会に参拝させて頂き、先生に姉トヨの病氣のことをお願いした。

ツネ先生は、早速に神様にその事を御祈念して下さった。御祈念してくださる途中、ツネ先生の目に女の人が白装束、いわゆる死の着物を着た人が通り過ぎて行くのが映り、これはいかんと思われ又、改めて御祈

念下さったところ、又、初めの時と同じように見えられ、ツネ先生も何とか助けて頂きたいとして三度目と改めて御祈念下さった。

でも前と同じような場面がツネ先生の目に映られ、ツネ先生も神様にいくらお願いしてもこの人は助けて頂くことは出来ないのだらうかと思われたが、又お気持ちをご改められ、四度目、今度は、

「私（ツネ師）の命を十年短くして頂いても結構でございますから、この氏子を助けて頂きとうございます。」と一心に命をかけて御祈念して下さいましたという。丁度、その教会のツネ先生の

御祈念中病床でトヨは夢か現か、幻かというような生死の境をさまよっていた。

おなかはふくれて丁度子供を身にもった生み月のような状態で、医師もこのおなか破れたらその時が死ぬときだと言われ、皆心配して見守っていたとの事で、トヨ自身は、夢現の中に大きな真黒い舟が見え、その舟には大勢の人が乗っていて、その中に七十歳で亡くなった、トヨを最後まで心配して、トヨのヨの字をよう言わずに、トヨ言つたまま息を引き取つたという、トヨの実父、仁太郎が乗っていて、舟の中からトヨに向かって、「お前も体が弱い上、苦勞の多いことだから、いっそう早くお父さんの側に来るか。」と言つて手を差し伸べてこられ、トヨもこちらから、「そんなら行く。」と言つて手を差し伸べ、まさに手をつなごうとした瞬間、真黒

い着物を着られた人がさつと、父とトヨの間に入られ、「今行つてはいかん。」と言われたのに、はつと思つた瞬間、トヨは目を覚ました。

すると、おなかブスーというかすかな音がして、トヨが見てみると、へそが破れて、血膿が出ておなかひつついてしまつたという。

あんなに大きく腫れていて、布団が触つても痛いので上から布団を吊つて着ていたおなか、少しも痛まず、ひつついてしまつたのでトヨはびっくりして、これこそ金光様のおかげを頂いたのだと、大変有難く思つて、妹キクノが神様から頂いて来た御神酒をおへそに入れさしてもらい、御神米の御紙をはらせて頂いて眠ってしまったとのことであつた。

トヨにしてみれば、今まではり裂けんばかりのおなかで、夜もぐっすり、眠るといふことが

なかつたので、おなかひつつき小さくなつたので気持ちよくなり、深い眠りに入つていたのであつた。

そんな事とは他の者は知らず、医師から、おなか破れたら死ぬときだと言われていたので、もうこれで目を覚ますこともないのだからとトヨの布団の回りを取り囲み、泣悲しんでいて、葬式の支度に取り掛かつていたという。

そんな時トヨは久しぶりにぐっすり眠り気持ちの良い眠りから覚めた。

周りにいた人達はびっくりして、何かにとりつかれたのではないかと、いろいろ慌てたことであるが、トヨの様子が、違ふようなので、落ち着いてトヨの夢の中での話を聞き、これは金光様のおかげを頂いたのだと、大変皆も有難く喜んでくれて、トヨもへそを見てみると、御神米の御紙に血で書いたよう

な一センチ五ミリ位の横一の線が一本書かれていて、他は何も汚れていないので、傷はこれだけだったのかと思ひ、へそを引っ張って見たが、もうきれいに口を閉じ引っ張ってもどうしても開かず、実に不思議な、大変大きなおかげを一夜の内に頂いたのであった。

トヨは、金光様に命のおかげを頂いたのである。  
早速教会へも御礼に行き、ツ

## (二) 信者としての信心生活

命のおかげを頂き、元気になつてからのトヨの信心は、金光様が朝三時五十分の御出ましで四時の御祈念をなさると聞き、その四時の御祈念に間に合うようにと思ひ、朝早く家族の気ずかないように毎日起き、体に水をかぶつて身を清め、御祈念の時間より十分早く教会に着くよう参拝させて頂いたという。  
寒い冬の日などは、ツネ先生

ネ先生も有難く大変喜んで下さり、この時ほど、トヨ自身はもちろんのこと、皆も金光様のおかげと喜び感激してくれたという。

又、知らない他人の人達も、この事を聞いて、  
「話を聞かせてもらいたい、へそを見せてもらいたい。」  
と見世物でも無いのに、訪ねて来た人がたくさんいたということである。

がまだ門を開けておられない時などもあったが、そんな時は、お賽銭を戸の隙間や、敷居のすいたところから、指で弾きこみ教会の玄関の中に入れてお供えし、外に座つて、風に吹きさらされながら御祈念をさせて頂いて帰つたという。

ツネ先生も信者さんも若いのによく出来ると感心されたという。

トヨは、こんな有難い神様はないと、心の底から神様が好きになつた。

又、その神様のおかげを頂かせて下さった岸上ツネ師を命の恩人として、生神様のように思えた。

それから、命をかけてのトヨの信心が始まり、金光教の道に御神縁を頂いたのである。

又、ツネ先生の御教えを聞かせて頂ながら、トヨは、信心をさせて頂くまでは、体が弱いという事で、着物でも木綿などは着ず、身に少しでも重たく感じない軽いものを着、足には軽い履物を履き、手には金の指輪をさしていたというが、

「これではいかん。」  
と思ひ、さっそく着物も木綿の着物に変え、履物も一番お金の

安い物にし、金の指輪をしずかに指からはずし、身仕度から質素なものに変えた。

そこから出てきたお金を持ってツネ先生が御布教されて間もない頃であられたので、毎月の教会の家賃として紙につつみ、お賽銭箱の中に入れてお供えをさせて頂いた。

又、食べられる事にも困られる時代であられたので、トヨが夕方買物に出た時、家族の買物をおかずはツネ先生に頂いてもらおうと、教会の裏口から誰にもわからないように入りツネ先生のお膳箱の中に入れてお供えさせてもらい、帰ってから、自分はある合わせのもので食事をさせて頂いたとのことである。

神様、ツネ先生にお仕えさせて頂く分は、自分を質素につめて、家計や、家族に迷惑をかけるような信心のあり方ではな

ったようである。

でも、家族では、やはりお母さんが、いろいろとトヨの居ずらいように仕向けてこられるので、主人、徳一に、

「私と別れて下さい。」

と頼んだが、いくら頼んでも聞き入れてもらえないので、

「このままではいけない。」

と思ひ、トヨが二十六歳になつたある日のこと。

お便所の中にハサミを持って入り、今まで丸まげに結っていた髪にハサミを入れ、髪を切つて後家頭といわれる髪に結つて出て来たという。

それは女にとつてとても言葉に言い表せない辛い勇気のいる事だつたと思うのである。

トヨの姿を見て主人、徳一もびっくりして、

「お前がそこまで決心をして出て行くというのなら、わしもこれ以上とめる事も出来ないから、

お前の好きなようにするがいい。しかし、わしはお前と離婚はしない。

たとえ生きている間は別れて暮らしていても、妻はお前一人だと思つて一生暮らす。

兄嫁とも一緒にはならない。

そのかわり、お前が先に死んだらわしが引き取つてお祭りをする。

わしが先に死んだらお前の側に行く。

生きている間は絶対お前の邪魔はしない。」

という事で約束を決め、トヨは一人で家を出て、教会のツネ先生にこの事を御取次申し上げ、ツネ先生の許しを頂き津守教会へ修行に入ったのである。

主人、徳一にとつても、トヨにとつても、嫌いになり別れるわけではないので、さぞ辛い淋しい事であつたことと思われるのである。

## 教会修行

岸上ツネ師は一人身の御布教だったので、トヨはその内養女にして頂き、教会で暮らす事になったのである。

トヨは命をかけて、一生懸命信心修行に励み務めて、ツネ親先生にお仕えし、教会の御用をさせて頂いた。

トヨは十六歳の時、胸の骨を折り、棚の上の物なども手を上げて取ることが出来なくなっていたのが、信心させて頂くようになってから、特別そのことを神様にお願いさせて頂いていた訳ではなかったが、神様は知らぬ間におかげを下さり、手が上に上がり、棚の物でも取れるようなおかげを頂いていたのである。

## 兄の元に帰る

兄、岡元喜馬（おかもとときま）、初恵（はつえ）夫婦と、長男、豊茂（とよしげ）が高知県の本

る。

又、妹キクノも姉トヨの代参で教会の参拝をさせて頂くようになってから、信心の稽古を津守教会でさせて頂いていたので、同じ教会に参拝させて頂いていた雷清次郎（いかづちせいじろう）エイの長男、好一（よしかず）と婚約ととのい、キクノには両親は亡くなっていて、頼る人がいなかったので姉であるトヨが、親代わりになり、教会で式を上げ嫁入りをさせたのである。

キクノの主人、好一の妹で峯子（みねこ）さんという人がいて、その人が大変体が弱く困っていたところ、岸上ツネ親先生

が神様のところ、教会で御用させて頂きおかげを頂いたということで、峯子さんも養女にもられる事になった。

そこで、又トヨは考えたのである。

峯子さんはまだ年が若いから、ツネ親先生がお養子さんをもってお世話になられる事も出来る。

私にはそれが出来ない、峯子さんがもしお養子さんを迎えられるようになったら、私がここにいては邪魔になると思い、それとなく教会を出ることを考え、ツネ親先生の許しを頂き、岸上ツネ師とお別れをしたのである。

山（もとやま）に住んでいた。

トヨはこの実兄を頼ってここで暮らすことになった。

本山には金光教の布教所があり、トヨはここでも信心の稽古をさせて頂いた。

兄嫁である初恵さんという人は、大変思いやりのある人でトヨによくして下さったという。ここでもトヨは大病をした。でも初恵姉さんが回りの人がそんなにしなくても言う程にトヨの好きなものを食べさせてくれ、一生懸命世話をして下さいったという。

そのおかげで無事大病も全快をさせて頂いたとのことである。

初恵姉さんが二人目の子供が生まれることになったが、その子供を三ヶ月で流産してしまつた。

それが元で腹膜をおこし、わずか三日の病で、三歳になる長男、豊茂をトヨに頼むと言い残して二十七歳の若さでこの世を去つたのである。

トヨにとっては、初恵姉さん

## 金光教南宇和教会へ入る

南宇和教会には、トヨの実姉ハルノが参拝させて頂いていた。

との本当に悲しい別れであった。でも豊茂を頼まれた責任を感じつつ世話をしながら暮らしていたが、兄、喜馬が九州の大分の方へ行きたいということ、トヨは豊茂をつれ、兄と共に大分へ行つた。

そこでも金光教の教会に参拝させて頂き、トヨは信心の稽古に励み豊茂を育てていた。

その内に兄、喜馬が再婚したいと言ひ出し、御本部へお参りさせて頂きそのこと三代金光様に御取次させて頂いた。

三代金光様は、

「子供の幸せを考えるのなら、再婚はしない方がいいでしょう。自分自身の幸せを考えるのなら、再婚しなさい。」とお返事を下さつたという。

兄、喜馬は若いせいもあつた

トヨも姉と共に信心の稽古をさせて頂いた。

のか、自分の幸せを考え再婚したのである。

そして次々と子供が生まれたが、その姉さんは亡くなった初恵姉さんのような人ではなかつた。

豊茂を何かにつけて邪魔にした。

戦時中のこと故、その内、兄、喜馬は戦争に行くことになった。

トヨは、兄の留守中、兄嫁や子供達とサンパツ屋をして生計を立てた。

その内、兄、喜馬が戦地から無事帰って来て、豊茂も六年生になつたので、もう離れても大丈夫だろうと思ひ、トヨは故郷である、愛媛県南宇和郡城辺町小西町へ帰つた。

その内、南宇和教会の親先生で佐田幸作（さだこうさく）師

が御帰幽になり、若先生であるお嬢さんが一人になられた。

一人では教会の御用も、又、若い若先生一人ではと、信者さん達も言われ教会で共に御用させて頂くには、野村さんが一番

## 金光教学院での生活

金光教学院入学テストの時、トヨには学問がないから、学校も行ってないので、いろいろ思っても書くことが出来ず、書けるのは名前くらいのことなので、テストに出た科目全部の答案用紙には、人に迷惑をかけないよう、教会名と、自分の名前だけ書いて、答えは何一つ書かず、テストの時間中、心の中で大祓いをして通して御祈念をさせて頂いていたとのことである。

そのようなことで、テスト用紙は白紙で出したものであるから、学院の先生方も大変びっくりされ、後で呼び出しがあり、いろいろ聞かれたという。

の適任者であるとのことと、トヨが教会に入って若先生と共に御用させて頂くことになったのである。

いろいろ御用させて頂く中に、教師にならせて頂いてきた方が、

トヨは、

「学院へ入学させて頂いたら、勉強します。」

と答え、学院の先生方も、「それなら傍聴ということにして、入学させるが、正式な入学でないから、中間テストで点が足りなかつたら、やめさす。」と言われ、学院へ入学させて頂いたのである。

それからトヨは一生懸命先生に教わる事を勉強した。

どんな時にも、腰には帳面と鉛筆をぶら下げ、字の稽古をした。

勉強の時間はもちろんのこと、炊事で御飯を炊く間、道を歩く

いいのではないかとということになり、トヨは、三十八歳の時、金光教学院へ入学する事になったのである。

時、いつも勉強の稽古を頭から離す事なく、それこそ、一心になつて勉強したという。

そのかいあって、中間テストの時は、何の科目もみな七十五点以上取つたという。

その勉強の疲れも出たのか、又、大病である心臓がつけて倒れ、つめつてもどうしても痛さも何も感じなくなり、動けなくなつてしまった。

医師も、

「これはどうも。」

と頭をふられたとの事であるが、トヨは絶対安静で休んでいる時にも、必ず神様のおかげを頂いてみせると、一心に御祈念をし、

気をはつていたという。

学院の先生は、直る見込みがないから、連れて帰るようにと、南宇和教会の親先生、白石キヌエ師に通知が行き、キヌエ親先生がびっくりして連れに来られた。

トヨは、必ずおかげを頂くから帰らないと言ひ張り、キヌエ親先生も困られ、学院の先生方は皆、反対で連れて帰ることを勧められたとのことであるが、中で只一人、講師をしていた岩手県の盛岡教会で御用されていた、藤彦五郎（ふじげんごろう）師が、力になつて下さり、

「野村があんなに言うのだから、願いを聞いてやつてもらえないだろうか。」

と頼んで下さつたとのことで、他の先生方も、

「藤先生がそんなに言われるのなら、我々はどうなつても知らないから、野村の事は藤先生が責任を持たれるように。」

とのことで、トヨも、藤先生の顔を汚すような事になつては申し訳ないと思ひ、どんな事があつてもおかげを頂かねばと、一心に神様に御祈念させて頂いたとのことである。

学院の先生方はそれも、三日間でおかげを頂くようにとの日を切られ、その間におかげをよる頂かない時は、帰るようにと言われ、その二日目の最後の日、トヨは、今日の日は何が何でもおかげを頂かねばと、付き添うて下さつてあるキヌエ親先生に、学院の人達が朝の参拝に行つてゐる留守に、

「私を起こして立たせて下さい。」とお願ひすると、キヌエ親先生は、

「そんな無茶な事は出来ん。」

と断わられたそうであるが、トヨは、

「どうしてもおかげを頂かねばなりませんから、無理でもどうでもすいませんが、手伝つて下

さい。」

とお願ひして、キヌエ親先生が立たせて下さる、倒れる、又起こしてもらう、又倒れる、両方がその繰り返しに疲れる位になつたが、その内に倒れるまでの時間に間があるようになり、一分、二分、三分、四分、五分と時間が出来、これならというので、着物を着せてもらひ、修徳殿の御広前に、物にすがり乍、歩いて行き、御祈念をさせてもらつていたという。

そこへ学院生の皆が参拝から歸つて来て、

「今日は誰も休んだ人はいなかつたけれど、御神前に誰かいる、誰だろう、今日休んでいるのは、絶対安静の野村さんだけだ。」というので、じいっと覗きにこられ、休んでいた野村さんだという事になり、大騒ぎになつて、講師の先生に伝えに行き、先生方も皆来られ、

「どうやってここまで来たのか。」

と聞かれ、トヨが、  
「おかげを頂いて歩いて来ました。」

とお答えすると、

「そんなはずはない、それなら歩いて帰って見せ。」

と言われ、トヨも一心に神様にもお願いさせて頂き乍、帰りは何に頂いたとこのことで、先生方も、学院生の皆もびっくりされるやら、有難いと思われるやらで、神様のおかげで絶対安静だった心臓がつけのおかげを頂いたのである。

これでトヨは、又学院で修行させて頂く事になり、キヌエ親先生もお喜び下さり帰られたとのことである。

しばらく日が過ぎ、今度は、キヌエ親先生の方から、便りで、「体の具合が悪くて御用にならないから、早くおかげを頂かせて頂けるよう、お願いしてもら

いたい。」

との事であり、トヨは今度は私に帰ってキヌエ親先生のお世話をさせて頂かねばと思い、御本部御広前に参拝させて頂き、御結界で御用下さってあった、三代金光様に、

「南宇和教会長、白石キヌエ親先生が御病気とのことでございますので、私が学院をやめて帰らせて頂いて御世話をさせて頂かねばなりませんから、帰らせて頂きます。」  
と御取次をさせて頂いたとのことである。

三代金光様は、  
「貴女が帰られても、親先生の病気がよくなるなら保証はないのでしよう。」

貴女が帰らなくても、親先生の御病気さえよくなられ、御用されるようになったらいいのでしよう。

貴女は学院で修行なさい。

親先生は必ず全快のおかげを頂かれますから。」  
と言われ、トヨも、

「そうでございますか。」

とお礼を申し上げ、御結界を下がりがり、そのことキヌエ親先生にお便りすると、キヌエ親先生より、すぐお返事があり、

「トヨが三代金光様に、御取次をお願いさせて頂いた日、時間より、不思議に体の具合がよくない、おかげ頂いて御用させて頂いているから、私の事は心配しないで、野村さんは、学院で最後まで修行させてもらい無事卒業させて頂いてから帰って来なさい。」

との事で、トヨは途中で帰る事なく、最後まで修行のおかげを頂き、金光学院を無事卒業させて頂き、金光教の教師として御取り立てを頂いたのである。

## 金光教南宇和教会での御用

金光教の教師として御取り立て頂いた野村トヨ師の新しい御用の生活が始まったのである。

金光教南宇和教会の副教会長として御用させて頂くようにならせて頂いたトヨ師は、御結界の御用、万事の御用を神様に一心におすがりしながらさせて頂いた。

信者さん達も、

「野村先生、野村先生。」と信頼してすがって来て下さったとの事である。

先代、佐田幸作師の奥城が出来ていかなかったためか、どういう事か、わからないが、信者さん達の夢枕に、先代の幸作親先生が立たれるという事で話が持ち上がり、トヨ師が発起人として、信者さん達と力を合わせ、奥城を立てさせて頂く御用もさせて頂いた。

おかげで奥城も出来上がり、

信者さんと共に有難く神様に御礼を申し上げさせて頂いたという事でありました。

キヌエ親先生もお年頃になられ、お養子さんをお迎えされるという事になり、トヨ師は自分がここにはお邪魔になると思ひ、南宇和教会を出る決心をし、その時、教師のままに出たのでは、後に問題が出来ると思ひ、教師をやめて出ることにした。

それを、愛媛県川上教会長であられた、越知常太郎（おちつねたろう）師が聞かれ、

「貴女は金光教の教師をやめてはいけない、貴女のような人は御道の宝だから、教師をやめず、南宇和教会がいやなら、外の所へ布教すればいい。」

と言って下さったとの事であるが、トヨ師にも考えがり、教師をやめて南宇和教会を後にする

事にし、その手続きを教務所（教務センターの旧名）へ出したところ、丁度、教務所で御用されていた高知教会長、道願政治郎（どうがんまさじろう）師が、「今度御用させて頂きたいと決心がついた時には、私を訪ねて来なさい。」

と言って下さってあったとの事もあり、教師を辞して二年間の日が過ぎたが、改めて御道の御用がさせて頂きたくなり、それも高知県でと思い立った。

道願政治郎師に願ひ出、教師として復帰させて頂き、御道の御用をさせて頂くため、昭和二十年一月十一日、四十四歳でトヨ師は、愛媛県南宇和郡城辺町を後に、高知県の高知教会、道願政治郎教会長の元に弟子として修行に入らせて頂いたのである。

## 高知教会での修行生活

金光教高知教会に入らせて頂いたトヨ師は道願政治郎親先生に、

「私は今までの事は、みな忘れて、一生懸命、道願政治郎親先生を只一人の親として、私の命の限りお仕えさせて頂きたいと思いますので、親先生も私の事を本当の子供だと思ってお付き合い下さいませ。」

とお願いして、一生懸命教会修行に励んだのであった。

時期が来れば、いずれかの布教地を定めんと思っていたが、当時は太平洋戦争末期のため、戦争は日増しにはげしくなり、振起布教などは到底不可能な事だから、

「今少し時期を見るように。」と政治郎親先生も言われ、修行させて頂き時期を待たせて頂いていたが、ついに、昭和二十年七月三日から四日に掛けて、大爆撃があり、高知教会もそれを

受け、建造物を始め、神具から家具、衣類など一切丸焼けとなり、教会の御家族も疎開されたり、召集をされたりして、ばらばらになられた。

トヨ師も着のみ着のままのような状態になられ、その内、昭和二十年八月十五日終戦となり、高知教会も残られた御家族は、政治郎親先生と、お嬢様一人になられ、トヨ師は三人で暮らす事になった。

政治郎親先生は間借りをされ、急場仮の御広前としてそこで御奉仕される事になった。

そんな時、どんな時も御一緒だった美柝子（みねこ）お嬢様が御病気になられ、トヨ師も一生懸命看病されたが、時期も悪く治療の甲斐無く、昭和二十一年一月二十一日、雪の降る寒い日、トヨ師に、

「私を起こして抱いて。」と言われ、その様に膝に抱かせ

て頂くと、

「私は教会に生まれさせて頂き、ここまでお育てを頂いて来たけれど、金光教の教師にもまだようならせていなかったし、御用もさせて頂いていないので、神様に相すまん事だと思うので、私がいなくなったら、いつかは、野村さんも布教に出るだろうから、その時は、私と一緒に連れて行って、そうしたら、私は霊様として少しでも野村さんの布教のお役に立つ様共に御用させて頂くから、必ずそうしてね。」と言われ、トヨ師も、

「私一人勝手にという訳にもいきませんが、お嬢様のお気持ちそのまま、親先生にお伝え申し上げ、かまわないとおっしゃって頂ければそうさせて頂きますから。」

と申し上げ、お嬢様も、  
「今死ぬという事は、私も残念なけれど、もうお別れね。」

いろいろ野村さんにはお世話  
をかけたね、ありがとう。」  
と御礼を申され、トヨ師の膝に  
抱かれたまま二十五歳の若さで  
御帰幽になられたのである。

悲しい淋しい美祢子お嬢様と  
のお別れであった。

それから、高知教会も焼け跡  
に仮会堂の建設を始められ、そ  
の年七月に落成になり、復帰さ  
れたのである。

その当時は、教師に階級があ  
り、昭和二十年十二月一日付け  
で、トヨ師は、補権訓導（ほご  
んくんどう）にならせて頂いて  
いたのである。

又、トヨ師には、子供がいな  
かったので、先になつての後継  
者として、実妹でトヨが二十六  
歳の時、親代わりとして、雷に  
嫁入りさせたキクノの長女、美  
代子（みよこ）、十八歳を養女と  
してもらい、金光教学院本科に  
入学させた。

昭和二十一年の四月春の御本

部の御大祭に政治郎親先生が御  
参拝になられ、三代金光様にト  
ヨ師が布教させて頂くに当たり、  
布教地をお決め頂くからとの事  
で、トヨ師も政治郎親先生のお  
供をさせて頂き、御本部へ参拝  
させて頂いた。

政治郎親先生が紙に、

（高岡郡高岡町、長岡郡御免町、  
香美郡野市町）

と三つの地名を書かれ、三代金  
光様にお届けになりました。

政治郎親先生は、金光様に、  
「思召しの所に丸を付けてやっ  
て下さいませ。」

とお願いなさると、金光様は筆  
をお取りになり、高岡郡高岡町  
という所へ丸を付けて下さった  
とのことでした。

これでトヨ師の布教地が決ま  
り、高岡郡高岡町（現在の土佐  
市高岡町）に布教される事にな  
ったのであります。

トヨ師は、高知空襲の時のこ  
とを、この様に話しておられま

した。

「三日の夜から四日に掛けての  
空襲で大爆撃を受けた時、三日  
の夜は月次祭の夜だったので、  
祭典後、親先生が、空襲の様子  
を見て来る様にと、言われたの  
で、女の身であっても、修行生  
なので、身仕度を整え、様子を  
見るため、屋根の上に乗ると、  
空から爆弾が、ばらばらと戦闘  
機から、投下され、夜空は赤く  
日に染まり、家々の軒下に干さ  
れた洗濯物に落ちた火の粉が燃  
え移り、地獄絵があるのならこ  
ういうことであろうかと思える  
ような様だったので、私は、急  
いで下に下り、政治郎親先生に  
『今夜はここももう駄目の様で  
すよ。』

と報告させて頂くと、

『恐ろしいことを言うな。』

と言われたが、私は、

『本当でございませうから、早く  
お支度をして下さい。』

と申し上げ、教会には、どんな

時にも無くしてはならない重要書類があるので、政治郎親先生がそれはいつでも持ち出せるよう用意をされていたので、私はその大きな書類の入った重たいトランクを右手に持たせてもらい、ばらばらになつては大変なので、左手は政治郎親先生の手を引かせて頂き、一心不乱に心の中では御祈念をさせて頂きつつ、非難場所に逃げ延びたこのことで、爆撃を受けた後は、道端には死体の山があちらにもこちらにも出来ていて、道行く人も逃げ惑つたのであろう、手の無い人や、大怪我で動けぬ人、血を流しながら当ても無く夢遊病者のように歩く人、まるで生き地獄を見るようであったが、そんないろいろの人を見ても、誰がどうして上げるといふことも出来ず、本当に戦争の為せる技とはいえ、残酷極まり無い有様に、私は恨めしくさえも思つたことだつた。

そして私たちも動かねばならないので、昨夜持つて来た重要書類の入つたトランクを持ち上げようとすると、突けども引けどもびくりとも動かず、その持ち上げられないトランクを前に、私に神様は昨夜は御力を貸して下さい、持たせて下さつたのだなあ、としみじみ思わせて頂くと共に、本当の命がけになれば人の力も恐ろしいものだなあ、と思わせて頂いたことだつた。」と私に話して下さいてありました。

いよいよ高岡町御布教出発に当たり、天地金乃神様、生神金光大神様、先代、道願縫（どうがんぬい）師の御霊神様、又美柰子お嬢様の御遺言のことと政治郎親先生に申し上げ、政治郎親先生も、「そう言うことであつたのなら、美柰子の願いをかなえてやってくれ。」とおっしゃつて頂き、その美柰

子お嬢様の御霊様を共に高岡町御布教の先代として、御供され、又お金三十円と、メリケン粉五日分と、千文（ちふみ）奥様の真心の品々を小さな袋に詰め、肩から吊し、神様、御霊神様は、首からかけ胸に抱かせて頂き、トヨ師は、着のみ着のままの姿で、二年間の高知教会での修行を終えられ、政治郎親先生皆様と淋しいお別れをされ布教には心を燃やして、昭和二十一年九月二十三日、女の身一つということとトヨ師四十六歳で、布教地である高岡町へ四里近くの道を歩いて出発されたのであります。

一步一步、始めての誰一人待つ人のいない土地へ神様、金光様、御霊神様の御神徳を信じて、ただひたすら心中祈念をされながら、歩かれたことと思うのであります。

## 高岡町での布教

高岡町の吹越えまで歩いて来られると、一件の店の前で足が急に前に進まなくなられ、どういうことであるかと思われ、引き返すと歩けるのに、前には進まないという事で、トヨ師は、仕方無いので、その店に入られ、色々話をされたとの事である。

その店は、岡崎茂太郎（おかざきもたろう）様といわれる人が住んで居られ、話を聞いて下さり、そう言う事ならというところで、二階を貸してもらえる様になり、さつそく、何一つの御神具も無いがささやかな御広前を作られ、高知教会の奥様に頂いて来たメリケン粉を練っただけの物を、御神飯の替わりにお供えされ、親神様と御霊神様へ御礼と御詫びを申し上げられたのである。

「神様、御霊神様、只今、無事布教地へ着かせて頂きました、有り難うございました。」

厚く御礼を申し上げます。

私の様な何も分からぬ者をお使い下さいます事は、ご迷惑な事でございますが、万事をお許し下さいまして、今日より、吹越の氏子始め、高岡町近郷近在の氏子一同が助かり救われます様、私をお引き回し御用にお使い下さいませ。」

と、一心に御祈念されたのが、御布教の始まりであつたのです。

又、トヨ師は、

「高知親教会先代道願縫師が明治二十四年十月二十三日に、御年四十六歳で、この土佐の地で難儀な氏子の一人でも多く助けたいとの事で、女の一心岩をも貫くという御教えを頂かれて、あらゆる難儀を乗り越えて、お進み遊ばされたその御心の万分の一でも頂きたく思つて居ります。」

と一心に御祈念されたのであります。

只ひたすら、一心に氏子の助かりを祈られる、命を掛けられての祈り願いしか無かつたのです。

それより二日目の朝、家主（岡崎茂太郎）さんが見えて、私の親戚の者で、七十五歳になる井上ウシ（いのうえうし）というお婆さんで、医師も手を離され、危篤状態で、京都の娘達に電報を打ち、娘達が来るまで、命のあるようにと困っている人があつたが、頼んでみてくれないかとの話でありました。

トヨ師は早速、

「貴方が代参して信心をして上げなさい、必ずおかげになります。」

と話され、

「それでは本人の着物を持って来るから。」

と言われたが、トヨ師は、

「着物はいりません。」

私の御供させて頂いた神様は、天地の親神様です。

貴方が真心から本人に成り代わり、今日まで七十五年間生かされて生きてきた事にお礼を申し上げ、今日まで目が覚めたら暑い寒いと御時候に不平不足をいい、食べるものには、甘い、辛い、酸っぱいと不足をいい、見るもの、聞くものに愚痴をこぼし、親や夫や子供へと勝手気ままをいい、する事なす事自分中心で、我情我欲の固まりで、日々を過ごして来たことを、お詫びをして上げなさい。

人間は誰しも自分で生きていくのではありません、生かされて生きていくのです、親神様の思召しが分かれば、おかげになります。

金光大神様は、

『天の恩を知りて地の恩を知らぬこと。』

と御教えになり、又

『疑いを離れて広き真の大道を開き見よ我が身は神徳の中に生かされてあり。』

と御教えになって居られます。その話を上げて上げなさい。共々に御祈念させて頂きましよう。

このお水は神様にお供えさせて頂いていた御神水です。

全身に吹き付けてあげておかげを頂きなさい。」

とお下げになりました。

家主さんは、

「死ぬほどの病人が水で治りますか。」

と言われるので、

「この水は神様の御神水ですから、我が心の持ち方一つで毒にも薬にもなると教えられています。」

有難く付けさせて頂けばおかげになります。」

と話され帰されたとの事です。

本人のお婆さんは大変喜んで、御神水を頂き、

「金光様、金光様助けて下さい。」と願ったそうです。

有難い事にその御神水を頂く

と、命取りといわれた全身の吹き出物が、不思議に良い方に向かい、娘さんが京都から来られた時には全快のおかげを受けていたとのことで、皆が大喜びで、親神様にお礼を申し上げられ、お婆さんは、やっぱり娘の所へ行くと言われ、元気になって京都へ行かれ、おかげを頂かれて、天寿をまっとうされたと後になって聞かれたとのことでした。

九月二十九日には、教祖御生誕祭に合わせて政治郎親先生に高知から御苦勞頂き、開教式を奉仕され、御供物もおかげ頂かれ、海川山野と揃えられ、信者さん二人と共に御奉仕になられたという事です。

トヨ師は布教始められ、わずか一週間足らずの間にこれだけのおかげを頂かれたということ、本当に勿体無いありがたい事だと思わせて頂くのであります。

## 布教当初の生活

明けて三十日は、高知親教会へ往復七里余りの道を歩いて御礼参拝されたのでした。

この日を始めとして、トヨ師は親教会の月に三度の御祭りには、雨天をとわず、四年間、雨の日は傘無しで濡れて歩いて参拝されたのでした。

履物を早くすり減らしてはいけないので、人家のある所は下駄を履き、人家の無い所は素足で歩かれるというような事で、時には、途中で日が暮れて帰り着かなくなったりした時は、川原で、夜通し大きな声で大祓いをあげ御祈念をされ、朝を待たれたことも度々あったとのことです。

洗濯一つにも、着替えが無いので、着物を着られたまま、川が近くにあったので、川の中に入られ、石鹸も無いので、手などで洗いをして、着物が乾くまでは、家の中に入られないで、

外で草など引いて、その間に乾かし半乾きになったら家の中に入れて御用されたということでもあります。

十月より一ヶ月百円の生活費をわずかの期間親教会より頂かれたのですが、娘、美代子が金光教学院本科へ入学させて頂いていた時だったので、月々の学費に送られ、トヨ師は、神様よりおかげを頂かれた分で生活をされるのですが、おかげを頂かれた一番は、御本部、親教会へお礼のお仕へをされた。

次は戦争が終わり、世の中も混乱した中で、難儀な困った人達が沢山おられたので、その人達に分け与えられた。

最後に残れば、トヨ師ご自身の生活費にされるのですが、何事もそういうお考えでされるので、中々ご自身の生活には残らないので、先ほども書かせて頂いたような生活になられるので

あった。

食べられることにしても、一週間も食事はされず、御神米だけ頂かれて、御用され、その様な時でも、親教会の参拝日があると、又、歩いて参拝されるということだったそうです。

その当時は、お米も配給だったので、それが、それすらも出が来ず、きび粉ばかり頂かれて、神様の御神飯もお粗末な事で、高知親教会の政治郎親先生も、布教が立ち行くまでは見ていくからと言って下さったそうです、トヨ師は、

「親にご心配かけたのでは、私がお断りませぬから。」とお断わり申し上げられ、神様に一心におすがり申し上げられて、おかげを頂かれてご修行をされたのでした。

又、トヨ師は、

「高知教会先代縫親先生は、親教会が大阪の難波教会だから、

私の様にいつも親教会へおい出にもならず、いつもお一人で神様にのみ、おすがり申し上げられ、いかなる難儀をも乗り越えておかげを頂きお進みになった。その御苦勞の程を思い浮かべられ、私は先代縫親先生の御布教に比べれば、苦勞の内には入らない。

先代縫親先生は金光教の信者一人もなき所へ道を開かれたのであるが、私は十三ヶ所に教会もあつて、高岡町には無くても、道の信奉者のある中に布教させて頂くのだから幸福だ。

金光大神様は、『本（もと）を取つて道を開く者はあられぬ行もするけれども、後々の者はそういう行をせぬでもみやすうおかげを受けさせる。』

との御教えの如く、土佐（今の高知県）布教は先代縫親先生が本を取つてあられぬ行をして下さつたので、後々布教させて頂

く者は、みやすうおかげを頂き、有難い事だ。」

と、感謝され御用されたのであります。

そうした中に、医師も手をはなした様な氏子が月々二人、三人は参拝され、おかげを頂かれたのでした。

そのような方達がお参りになり、御取次されると、トヨ師は、食べる事寝る事を忘れて一心に神様に御祈念され、道理を解き明かし、難儀苦しむ氏子が次々と救い助けられていったのであります。

その頃のこの地方の人の信心は、加持、祈祷、呪い、生霊、死霊、狐、狸つき、犬神、そういう迷信が好きで、病気で参拝に来られた人にでも、

「何にもついていない。『信心は本心の玉を磨くものぞや。』」

と言つたような教えをさせて頂くと大変なのです。

「この祈祷師は人を盗人の様に言つた。」

とか、

「何にも分らない、知らない。」とか言つて腹を立てて帰り、外の人にその話をし、又、

「我情我欲を離れて真の道を知れよ。」

との教えについて話されると、「お前より、俺の方がよく分かつている。」

と腹を立てられ、話を聞いて助かる道で病氣直しが先にあるのではない、心直しの神様だと話されると

「話を聞いて病氣が直るようなれば、いう事はない、我が田に水を引いた話は聞きとらない。」と腹を立てられ、たたり、さわりの話をしないと受け入れられないというか、道理の話が、道理として受け入れてもらえず、大変御苦勞をされたようです。

トヨ師がある日の事、親教会へ参拝の途中、道の工事をして

いた青年が、二、三人居り、そこを通り掛かられると、「コンコン狐のおばさんが来た。」と言って、

「狐よ尾を出せ。」と持ち合わせの棒で突きに来たそうです。

トヨ師は、夏のことであつたので、

「皆さん、このお暑いのに御苦労様でございます。」

と心からあいさつをされ、労いの言葉をかけられると、その青年達も張り合いが無く、

「これはちくと勝手が違うぞ。」と言って相手になる事を止めたという事でした。

又、寝食忘れての御用の中ですから、お疲れが出られたのでしよう、御用中に仮死状態になられた事があり、信者さんが参り合わせておられ、びっくりされ、一生懸命御祈念され、トヨ師に、神様にお供えになつておられた御神酒をお下げされ、そ

れをトヨ親先生に頂いてもらわれ、気がつかれ、おかげを頂かれたこともあつたそうであります。

又、トヨ師が御布教始められたその年、十二月十七日の御本部の報徳祭に参拝された時の事で、祭典後急に御腹が痛くなられ、娘美代子が学院生であつた関係で、学院の女子寮で休まれていると大疼きになり、医師を迎え診察して頂かれると、急性盲腸炎だから、早く手術をしないと一命が危ないとの事であつたそうで、先生方皆も手術をするよう進めて下さつたとの事ですが、トヨ師は、

「私は金光様に御取次御詫び申し上げます。」

もし死んでも結構です、手術は致しません。」

と申され、夜中痛み明かされたとの事でしたが、三時五十分の三代金光様の御出ましに改めて御取次お願い申され、一晚中痛

み明かした盲腸炎も御取次の時刻と共に全快のおかげを頂かれたとの事でありました。

医師も不思議だと驚かれ、先生方も大変喜んで下さり、無事帰宅されたとの事でした。

いろいろな事がある中に、信奉者も少しずつおかげを受けて、金光教の信心も分からせてもらえる様になり、人数も増え、昭和二十二年十一月三日、高岡町青木町に移転のおかげを頂かれたのであります。

又、トヨ師は昭和二十二年十月十日付けで訓導(くんどう)に任せられたのであります。

昭和二十三年の始めに、高橋正雄(たかはしまさお)先生が見えていて、トヨ師も会合に出席していると、正雄先生が、

「教会設立の願書は出したのか。」と聞かれたので、

「まだです。」

と、お返事すると、「早く出せ。」

と言われ、高知教会政治郎親先生にも言つて下さつたとの事で早速、昭和二十三年二月二十四日付けで教会設立の願ひ出をさせて頂き、月明けて三月一日に、僅か一週間足らずで、承認され教会設立のおかげを頂かれ、トヨ師も、昭和二十三年三月一日付けで、訓導のまままで、土佐高岡教会長に任ぜられたという事です。

昭和二十四年教団として、御取次成就信心生活運動が進められる事になり、その時の高知県の婦人教師代表として、役員の御用もされ、教会としては、教区巡教等も受けられ、又、トヨ師ご自身も、高知県の教会に巡教に講師としてまわられる御用などもされたのであります。又、暑さ寒さもいとわれず、いくら真夏の茹だるような暑さ

## 祈り助けられて行く信奉者

トヨ師の妹である、雷キクノ

にも、羽織袴をきちんと着られ、その上足袋まではかれ、身体中隙間の無い程、あせもが出来ておられても、少しも辛いような顔をなされず、涼しそうなお顔をなさり、

「有難いね、勿体無いね。」

と言われ、円満なお顔で、

「神様のおかげで有難い事です。」と言われ御用されていました。

私が来させて頂いてからも、どういふ事にも御生活される中、何一つ不平不足を言われたことが無く、いつも正装されていたそのお姿が、今でも私の頭にやきついていて、御徳のほどが偲ばれるのであります。

昭和二十四年十二月十日付けで訓導から、權少講義（ごんしようにうこうぎ）になられ、又、昭和二十七年十二月十日付けで權少講義より、小講義（しょうこ

うぎ）になられ、それから階級制度が無くなり、一同教師になられたのであります。

トヨ師は、御理解第五十七節の、

「金の杖をつけば曲がる、竹や木は折れる、神を杖につけば楽じゃ。」

との御教えをお心にしっかりと頂かれ、どのような御苦労の中にも、人に頼る事なく物品にすぎる事なく、神様を立て抜き、すがり抜き、又、政治郎親先生にお仕えになられるお心御態度は、外には無と思われ頂かれ方でありました。

又、人に対しても、物品に対しても、報恩感謝のお心を常に持ち続けられ、行いに現されるお人でありました。

は、長女、美代子が御神縁を頂

く事になり、子供を連れて初め

て土佐高岡教会にお引き寄せを  
頂いた時の事、御広前とは名ば  
かりの御広前で、御結界は小さ  
な木の箱を何処からかもらつて  
こられて利用されたのでしよう、

その箱をおかれ、その上に浴衣  
の布を掛けられ、焼け跡から拾  
つて来られたと言われ、焼けて  
壊れた半分しか無い硯がおかれ  
てあり、その様を見せてもらい、

「これが昼夜別なく氏子可愛い  
と私共総氏子の身の上を御守り  
下さる天地金乃神様を御祭りさ  
せて頂く所かと相すまなく、勿  
体無く、一人涙がこぼれた。」

とのことで、実妹にすら頼られ  
ることは無く、「只、神様、御霊  
様にのみおすがりになられての  
ことで、御苦勞は筆にも言葉に  
も書き現わす事の出来ない。」

又、どのような事が出来てき  
ても、親神様からのご試練と取  
り組まれて、只々氏子可愛いの  
神様のお心そのままに、トヨ親  
先生もその願いを受けられ、身

も心も天地の親神様におまかせ  
されて信奉者の助かりを祈り願  
い抜かれ、ご辛抱されたればこ  
そ今日の土佐高岡教会があるの  
だ。」

と感泣して話していました。

又、昭和二十四年三月一日の  
夜、雷キクノに男の子が生まれ  
た時の事、城辺の雷からトヨ師  
に御礼を申し上げて頂き、名前  
もつけて頂きたいとの電報が来  
て、トヨ師は早速、金光様、政  
治郎親先生に、土佐高岡教会の  
御広前より御取次を仰がれたと  
の事で、信奉者、二、三人参拝  
されていて、その方達と共に御  
祈念されたとの事です、すると、  
御祈念中に、

「光雄（みつお）とつけたらよ  
ろしゅうございましょう。」

と二度お声を聞かれたように思  
われ、御祈念終わり、

「今このようなお声を聞かせて  
頂いたのであるが、皆さんにも  
聞こえましたか。」

と、トヨ親先生が尋ねられると、  
「そんな声は誰にも聞こえませ  
んでした。」

と言われ、  
「聞かれたのは親先生だけでし  
ょう。」

と言うことで、トヨ親先生が金  
光様より聞かれたその名前を、  
手紙に書いて雷へ知らせたとの  
事でした。

雷の方では、長女、美代子が  
学院に入れて頂いていた時だっ  
たので、御本部にいる娘の所へ  
心配しているだろうと思い、男  
の子が生まれたので安心するよ  
うにとだけ書いて電報を送って  
いたら、それを受取り、気をき  
かせたつもりで、美代子が金光  
様に御礼を申し上げ、

「名前も付けてやって下さい。」

と、お願い申し上げると、三代  
金光様が光雄と書いてお書き下  
げを下さつたとの事で美代子は、  
早速そのお書き下げの名前を雷  
に送つたとの事でした。

雷には、土佐高岡教会のトヨ親先生から届いた手紙と、御本部の娘、美代子が送って来た手紙が、同じ日につき、両方開封してみると、両方の書かれた名前が同じだったので、本当に勿体無い有難いことだと、その事、トヨ親先生にも御礼申し、その事があってから、雷キクノはそれまでは、土佐高岡教会のトヨ親先生は私の姉だという気があったのが、そうではない、金光様、親先生なのだと心から頂かれるようになったとの話でした。

それから遠方なので年の春秋の御大祭、霊祭には、どんな事があっても参拝のおかげを頂き、毎月の御礼は、手紙で申し上げ、信心の稽古をされて、おかげ頂かれ、長女、美代子が教師に御取り立て頂き御用させて頂いていたが、外に出て御用がしたいという事で、土佐高岡教会を出たので、妹娘、登茂子（ともこ）が、どうしてもとの願

もあり、土佐高岡教会に御神縁も頂けたりしておかげを頂き、最後まで、金光教の信心を有難くさせて頂き、金光様、トヨ親先生を頂き貫かれて、昭和四十九年十月十二日に、トヨ師より二年遅れて御国替えをさせて頂きました。

金光様、トヨ親先生の御祈りを頂き、九人家族をかかえ、戦争中、又、終わってから、あの苦しい時を本当に大きなおかげを頂かれたのでありました。

又、土佐高岡教会が、今日になり、トヨ親先生がおかげを頂かれる様になられた蔭の力になられた人がありました。

その人は、市村まき（いちむらまき）さんと言われ、この人は喘息の上に、強度の神経にかかり、何処の病院へ行っても良くなられず、苦しみのあまりに夜の戸外をあてもなくさまよい歩いておられた時、見えぬ糸で引き寄せられるように土佐高岡

教会の門をくぐられ、

「ここはどうする所ですか。」と尋ねられたのが、御神縁を頂かれた始めであったのです。

それから、朝な夕なトヨ親先生の有難い御教えを聞かれる中に、又、トヨ親先生のご風格に心染まられ、唯々したわしく、なつかしく、親とも師とも思ひ上げ、頼みまつるようになられ、トヨ親先生が丁度、まだご信者になられて間もない、二十六歳の頃、岸上ツネ師を頂かれお仕えになられた如く、この人が、毎日のトヨ親先生のお食事を自分の食べられる分を減らされ、雨の日も風の日も一日も欠かす事なく作ってかごへ入れて教会にお供えに来られ、トヨ親先生家族の人に頂いてもらわれたのであります。

又、教会にお風呂が出来るまでは、

「お風呂がわきました、親先生どうぞお入り下さいませ。」

と言つて来て下さり、毎日お風呂も入れて頂きました。

又、まきさんは、体が弱かったので、いつもよい着物を着て、軽い履物を履いておられたのが、信心されるようになられ、一つずつ自分の身の回りを改められ、節約されて、それを神様の御用の費用に当てられ、教会の毎月の家賃を紙につつみ、お賽銭箱に入れてお供えになり、トヨ親先生が、外に御用で行かれる時の費用などいろいろと心を込めてそれぞれにお供えになりました。

又、トヨ親先生が御用でお忙しいので、身の回りのこと、こつこつ、それも人に分らない様に真心でされ又、女学校を出ておられ、頭の良い人なのでトヨ親先生が御用される上には、いろいろと書き物の御用もあるので、その御用もこつこつ自分でされたり、子供さんに書かされたりして御用されました。

トヨ親先生が御用される上に少しでもお役に立てばと、大きな蔭の御用をだまって実意丁寧な真心でお仕えになられたのであります。

土佐は鬼国、宿が無いと言われるほど又、土佐の中でも格別人情の荒い土地、高岡町での布教の御用をされていた、トヨ親先生に取られては、まきさんの御用は、本当に有難い、勿体無い事だと思われたことでしょう。

この様にして、神様にトヨ親先生に仕え抜かれ、御教えを尊く有難く頂かれ、実践に移される中に暗かったこの人の心も、明るい世界へ置き変えさせられ、病気はすっかり全快のおかげを頂かれたのであります。

その内、ご主人も信心に導かれ、夫婦共に土佐高岡教会の総代さんとして、初心を忘れられる日が一日とて無く心変わりされる事なく、蔭の御用が出来られ、

「私の身は市村春繁（いちむらはるしげ）の妻ですが、心は親先生の弟子だと思わせて頂いて下ります。」

と言われた、私も随分お世話になりましたが、物静かな頭のひくい、ご信心が出来られたこの人を忘れる事は出来ないのであります。

この方も昭和三十八年六月四日、トヨ親先生がお国替えになられたお年と同じく七十歳で亡くなられました。

又、昭和二十八年二月に御神縁を頂かれた人に小崎豊喜（こざきとよき）さんといわれる人がありました。

この人も、蔭に回りトヨ親先生を頂かれ、仕え貫かれて御用の出来られ一生を終えられた人です。

この人は大変働き者で、二十代で主人に死なれ、それから女手一つで小さな三人の子供を育て上げられた人で、小崎産業と

書かれたトラック二台持つてお  
がくずを買いに走り、それを製  
紙業の人に買ってもらって、生  
計を立てておられたのです。

ですが、事業が思うままにな  
らず、困って一人の人に金を  
借りに行つたところ、その人が、  
土佐高岡教会のご信者さんだつ  
たので、その人が、

「お金はないので貸す事は出来  
ないが、お金よりも、もつと助  
かる話をして上げるから、そこ  
で助けてもらいなさい。」  
と言われ、いろいろ金光教の話  
を聞かれ、又、神様がこの人を  
お導きになる思し召しがあられ  
たのか、早速、土佐高岡教会に  
ご参拝にられました。

その時は、当時、二万円程も  
する新車の自転車が盗まれたの  
で、

「どの方角の人が盗んでいった  
のか、見てもらおうと思ひ来ま  
した。」

と言つて来られたのが小崎さん

の御神縁だったのであります。

トヨ親先生は、

「私は易学も知りませず、太夫  
でもありませんので、祈祷して  
お伺いする事も知りません。」

と言われると、小崎さんは不思  
議に思われ、

「こちらの信者さんが金光様へ  
お参りして話を聞いて助かるよ  
うにと教えられ、お詣りさせ  
て頂いたのです。」

と言われると、トヨ親先生は、  
「それでは話をさせてもらいま  
す。」

とおっしゃつて、

「私方の信者さんは貴女のように  
な事が出来ましたなれば、すぐ  
にお詫びに参ります。」

『私の不注意不心得で、自転車  
を盗ませ、大切な神の氏子に盗  
み心を出させまして、誠に相す  
みません、お詫び申し上げて下  
さいませ。』

と言つて来ます。

貴女の場合もそうでしよう。

貴女が盗ませたのでしよう。

貴女が自転車を持つて立ち話  
とか、自転車に鍵をかけておい  
て、家の中に入っておれば、誰  
も自転車を持つて行く者はあり  
ませんが、息子さんが、買った  
ばかりの新調の自転車ですから、  
自転車の好きな人が通りかか  
り、これは良い品だ、自分もこ  
う良い自転車に乗って見たいと  
思ひ、盗む気はないが、つい自  
転車を見ている内に、誰もいな  
いので、無意識に乗つて、その  
まま何処かへ行かれたのでし  
ょう。

貴女が鍵さえかけてあれば乗  
れません、貴女が鍵をかけ忘  
れて、神様の大切な氏子を盗人  
にしたのです。

ですから罪は貴女にあります。  
金光教の信心をする気ならば、  
神様に御詫びをなさい。」

と言われ、小崎さんは、不思議  
な話を聞かされるところだと思  
われたが、

「お話の通りで、私が乗り捨てておいたのですから、私が悪うございます。」

と言われ、トヨ親先生は、「自分のした事が悪かったと分かれば、取られた自転車は取った人に上げなさい。」

貴女が上げさえすれば、人を盗人にするには及びません。

警察へ届けてはなりません。人を盗人にせず、真の信心でおかげを頂きなさい。

貴女の不注意心から御詫び出来て、又、盗んだ人がかわいそうと思う心になったらおかげになります。」

と御取次をされた。

小崎さんは、この道こそ真実人の助かる道だと信じられ、警察に届けずに家に帰られた。

すると間もなく、巡査さんが見えて、

「小崎さんは自転車を盗まれてはおらぬか。」

と言うて来られ、トヨ親先生と

今、

「盗人は作らぬ。」

と言って帰ったばかりなのに困ったと思い、もじもじしている

と、

「困る事はない。

警察へ上がったのではないが、『こうした所に置いてある自転車は、小崎のではないかと思うので、知らせてやってもらいたい。』

との事だから、一度そこへ行って見て、お前の家の自転車なれば取って帰れ。」

と言われ、教えられた所に行つて見ると、なくした自転車だったので、神様にお礼を申し上げ、貰って帰られ、教会へお礼参拝されたのであります。

トヨ親先生の御取次御祈念により、小崎さんが始めて金光教でおかげを体験され、トヨ親先生は、

「神様は、

『人を助けることを有難いとし

得て信心せよ。』

と御教え下されていますから、これから先もそのような心持ちで信心しておかげを頂きなさい。」

と御教えになり、小崎さんは金光教の信心を一筋にさせて頂くことに決められ、お話を一心に聞かれ、御取次を願われて家業に励み、自分だけが助かってもいけない。

家内一同が助からねばと思われ、自分嫁、孫、又嫁に行つた娘達一家、皆を実意に真心を込めて御取次願われ、高知親教会参拝、御本部参拝と信心を進められ、亡くなられるまで心変わる事なく金光様、トヨ親先生を頂き通し金光教の信心をさせて頂いてよかつた、御取次の有難さ、尊さを分かれ、いろいろな事がありました。都度つど御取次を心から頂かれ、おかげを頂かれたのであります。

ここでも、トヨ親先生の、神

様と御教えの頂かれ方、どの氏子も皆可愛いんだとの神心、親心の思し召しの程が感じられるのであります。

又、今は亡き人ですが、石元岩尾（いしもといわお）さんと  
言われる人があります。

この人は、戦争で子供さんを戦死させ、生きる氣力を失い、氣が狂った人のように人からも見られるようになり、生きている子供達からも嫌われるようになり、一日も早く戦死した子供の所へ行きたいと思つて暮らして居られたのです。

ですが、土佐高岡教会の信者さんが、岩尾さんのお母さんに、金光様の事を話されお母さんはすぐ娘の岩尾さんに話され、お母さんと共に土佐高岡教会に参拝されたのが、御神縁を頂かれた始まりでありました。

この人、石元岩尾さんは、まがった事の嫌いな氣質のしつかりした人で、信心も強く、トヨ

親先生を頂き貫かれ、信心の稽古をして居られたのであります。

昭和二十七年七月のある日のこと、波介川という流れの早い川へしじみを取りに行つておられたという、しじみといっても、あの小さいのではなく、水貝という大きな貝を、水の沢山ある所で、足で取つて居られたところ、足を踏み誤つて深みに滑り落ちられました。

石元さんはその時、年も五十五、六歳になつておられたし、その上、水泳が出来られなかつたので、どうする術もなく流されて、

「このまま死ぬのだ。」  
と思われたとの事ですが、何とかして、もう一度助かりたいと思われ、平生信心されている金光様に、

「助けて下さい。」  
とお願ひになりました。

そのとたんに足が岩に触り又、  
「金光様。」

とお願ひして、岩の上に立つと、体半身が水の上になり、そこに丁度船を操つていた人がおられ、その人がびっくりして助けて船に乗せて下さつたという事でした。

もしその時、金光様に岩の上へ上げて頂かなかつたらそのまま海に流されて、死んでいたと思われませんが、神様に一心におすがりされて、不思議なような出来事で、命のおかげを頂かれたのであります。

又、石元さんは、目の不自由な方で、家の中に居られても、戸に突き当たられる程の事でしたが、教会に参拝される時、朝早くでも、夜でも、

「金光様、親先生どうぞ。」  
とお願ひになり、自転車を跨れると、自転車の前が、急に明るく見えられ、事故無く無事に御参拝が出来られたという事であります。

又、縫い物をされるにも、針

の耳に、

「金光様、親先生。」

とお願ひになると糸を通すことが出来られたというのであります。

このようなおかげを頂かれたという事は、石元さんがいつも神様、トヨ親先生を頂き通しに頂かれ、神様を杖に信心の稽古をされていたのだなあと思わせて頂くのであります。

石元岩尾さんも、トヨ親先生の御取次御祈念なくして天寿を全うされる事は出来なかつたと思わせて頂くのであります。

又、この人も今は亡き人ではありますが、下島久未（しもじま くめ）さんと言われた人がありましたが、この人は、

「ご主人がご祈禱師に見てもらわれたら、

『来年は六十一歳で年回りが悪いから死ぬ。』

と言われ、又、娘さんが、腎臓病にかかり、そのおかげを頂き

たい。」

との事で御神縁を頂かれたのであります。

久未さんも金光様、トヨ親先生の御取次御祈念により、一心に信心の稽古をされるようになられご主人も長生きをされて、娘さんも病気が全快され、又そればかりではなく、ある時、松子さんと言われるその娘さんが、旅行中に、三輪車に五人と共に乗せてもらつていて、山道にさしかかった時、事故のため、十二メートル余りある谷底へ転落して外の人は死んだり大怪我をされたりしたのですが、久未さんの娘さんは、車が落ちる途中、

「金光様助けて下さい。」

とお願ひされると、車の戸が開いて、娘さんは車の外に放り出され、

「あつ落ちる。」

と思われた瞬間、落ちることが止まり下から手で持ち上げられたように娘さんの身に感じた

の事で、又、その瞬間、沖から風が素早く吹いて来て、ささえられた感じのまま、体が風に運ばれ、岩ばかりの中に、たつた一本生えていた松の木の枝の股になつた所に娘さんを落ちないように置いたという事で娘さんは松の木の間で手足を動かしてゐると余り車が通らない場所での事故だつたと言うのですが、その松の木が見える所を車が一台丁度通り掛かり、車の中の人

が、

「あんな誰も行かれないような松の木の間で何か人のようなものが挟まつているようだが。」

と見つけてもらい、その人達の知らせで、外の人達も来て下さりその人達のいろいろの工夫で、娘さんだけは、無傷で助けられたのであります。

人間の頭で考えて計り知れない不思議な事ですが、これこそ神様、金光様、トヨ親先生の日夜の御取次御祈念のおかげ又、

親の信心のおかげで、命の亡きところをおかげを頂かれたのであります。

その後も久未さんだけではなくご主人も娘さんも、金光教の信心の稽古をされ、全員天寿を全うするおかげを頂かれたのであります。

又、井上（いのうえ）さんと  
言われるおばあさんが、孫が病気で医師に治療してもらったのが、ある日の事、教会の前に病院がありましたので、その病院の先生に、

「もうこの子は駄目だから連れて帰れ。」

と言われ、仮死状態でぐったりなつた孫を途方に暮れて、病院の外に出ると、ふと目に入ったのが、金光教土佐高岡教会の看板で、おばあさんは駄目で元々だが何とか助かるものなら、助けてもらいたいと思ひ、その孫を抱いて、藁をも掴むような気持ちで、土佐高岡教会に入つて

こられ、トヨ親先生にその事を  
お願いになり、トヨ親先生も、  
「金光様はきつと助けて下さる  
から、共に御祈念をさせて頂き  
ましょう。」

と、おばあさんと共に一心に御  
祈念をされ、大祓いを何十巻も  
あげられている中に、そのお孫  
さんが、息を吹き返し、泣き出  
して、命の亡い所をおかげを頂  
いて喜んで帰られ、それから、  
いろいろと、信心の稽古もされ、  
金光様、トヨ親先生を頂かれて  
おかげを頂かれた人もありまし  
た。

又、楠（くすのき）さんと言  
われる人が息子さんが肋膜炎で  
毎日病院通いをしておられ、熱  
が下がらず医師も、

「何の関係でどんな治療をして  
も、この熱が下がらないのか分  
からない。」

と言われるとのことで、土佐高  
岡教会に御神縁を頂かれた人が  
あり、トヨ親先生は、

「これから毎日一ヶ月間お参り  
を続けなさい。」

とその息子さんに言われ、  
「そうします。」

と言うことで、毎日欠かさ事な  
くお参りをされ、トヨ親先生と  
共に金光様助けて下さいと一心  
に御祈念をされたという。

すると一ヶ月近くに、その息  
子さんが、トヨ親先生に、

「先生、僕の横腹の所が何か膨  
らんできて、固いような物が突  
つ張つて来よる。」

と言われたとの事で、トヨ親先  
生も、

「それは何だろうかね。」

と言って話され、何日かそれか  
らして、ある日の事、その息子  
さんがお参りに来られ、

「先生、僕の横腹の所からこん  
な物が出た。」

と言って見せてくれたのは白い  
骨のこぼれて折れたような物だ  
つたとの事で、それから、その  
息子さんの熱が出なくなり、両

親は、  
「今年の盆はこの子の盆になる  
だろうか、」

と、嘆いておられたのが、金光  
様、トヨ親先生の御取次御祈念  
を頂かれ、命の亡き所を手術も  
せず、不思議な出来事で、病氣  
も全快のおかげを頂かれ、医師  
もその話を聞かれびつくりされ  
たと言う事であります。

それから、親子が信心の稽古  
をされ、いろいろと助けられ、  
おかげを頂かれた人もありまし  
た。

又、一人のおばあさんが、土  
佐高岡教会にお参りになられ、  
「私には、狸がついて困ってい  
ます。

私についている狸を祓い退け  
てもらえないでしょうか。」

と言われるので、トヨ親先生は、  
「私は、拝み屋さんでも、何で  
もないので、そんなに言われて  
も困るが、私の所の教会にお祭  
りさせて頂いている神様は、天

地金乃神様で、天地の一番の親  
神様だから、狸も神に祭っても  
raithたいというほどのものなら  
道理も分からないという事もな  
いでしようから、話せば分かる  
でしょう。」

と言われ、トヨ親先生もその事、  
神様、金光様に御取次されて、  
おばあさんについているという狸  
に話をされたという。

するとそのおばあさんは、狸  
がついて話をする時は狸のよう  
な格好になり、話をされると言  
う事でトヨ親先生は御結界から、  
そのおばあさんについている狸  
は、おばあさんと共に御結界の  
外で話をされるのである。

トヨ親先生は、  
「あんたも神様に祭ってもらい  
たいという程の狸なら、このお  
ばあさんは、こんなにあんたに  
つかれるのを嫌がついているの  
から。」

又、世の中にはそんなのが好  
きという人もあるだろうから。

どうしてもつきたかったら、  
その人についたらどうか。  
このおばあさんから外れてや  
りなさい。」

と言われると、狸が言うには、  
「わしは、どこそこのほこらに  
住む狸だが、この度わしに子狸  
が生まれ、その子をおかつやかす  
訳にはいかず。

このおばあさんなら、人の善  
さそうな人で、毎日、飯も祭つ  
てくれそうなので、ついておる  
ので、今外れてやる訳にはいか  
ない。」

と言ったとの事で、トヨ親先生  
は、おばあさんに今度は、  
「あんたもそんなに狸につかれ  
る事が嫌なら、金光教の信心を  
させてもらいなさい、そしてお  
かげを頂きなさい。」

と言われると、おばあさんも、  
「それならそうさせて頂きます。」  
と言われ、トヨ親先生は、今度  
は狸に、

「おばあさんも、これから金光

教の信心をさせてもらおうということだから、はずれてやりなさい。」

と言われると、狸は、

「天地の親神様の取次者より頼まれるとはずれんという訳にもいかないが、今すつとはずれる訳にはいかん。」

今お前の体が生理で汚れているから一週間経ってきれいな体になって頼んだら聞いてやる。」ということで、一週間経って又、トヨ親先生が狸をさとされると、狸はずれるには約束があると、言う事で、狸が言うには、

「今わしは子育て中であるから毎日、ほこらに飯を祭ってくれ。」

そうして、金光教の信心をおばあさんがしている間は、はずれてやるが、おばあさんが信心を辞めたら、すぐ又引っ付いてやるから、その約束をしてくれるなら。」

という事で、おばあさんも、「その約束をするから、はずれ

て欲しい。」

という事で、おばあさんも毎日、土佐高岡教会へお参りをし、ほこらに御飯を祭って三年の月日が経った時の事、その間は、狸も約束を守り、一度もおばあさんには引っ付かずはなれていてくれたとの事で、おばあさんもこれ程嬉しい事はないと喜んで信心させて頂いていたのであるが、おばあさんが言われるのに、「私も年が行って、狸との約束で三年お参りをさせて頂き、信心させて頂いてきたが、その間一度も私に狸がつかなかったの、もう私のことを忘れているでしょう。」

と言われるので、

「信心を辞められることは、貴女の自由だから構わないが、人間にっこうとする位の狸だから、私は、忘れているとは思えないが。」

とトヨ親先生は言われたが、おばあさんは、

「そんな事はないでしょから、しばらく休ませて頂きます。」

と言われるので、トヨ親先生は、

「もし狸が約束を守って、あなたに付いたら、もういくら私の所に来て頼んでも、私の言うことも、約束を破るのだから、言うことは聞いてもらえないが、かまわないかね。」

と、念をおされたがおばあさんは、

「そんなことはありませんでしょう。」

と言われ、教会を出て家に帰りつかれると狸がおばあさんより先に帰っていて、おばあさんに、「今帰ったぞ、お前が約束を破ったのがいかんのぞ。」

と言って、おばあさんが死ぬまで狸はおばあさんについていたと言うことである。

トヨ親先生は、

「おばあさんが金光教の信心をやめなければ良かったのに、どんなものとの約束も破ってはい

けないねえ。」  
と時々話して下さってありまし  
た。

トヨ親先生の御生涯にはこう  
言う事もあられたようでありま  
す。

又、ある人は、トヨ親先生に  
横着や気ままを言った人があり、  
トヨ親先生は黙って聞いておら  
れたが、その人のあごが、急に  
何もしないのにはずれ、ものが  
言えなくなり、泣き出して、ト

ヨ親先生もそれを見られ、

「あんたは私に言うたつもりだ  
ろうけれど、神様におことわり  
をしなさい。」

と言われると、その人も、これ  
は言い過ぎた、怖いことだと気  
づかされ、心の中で、

「すみませんでした。」

とお詫びをされると、はずれて  
いたあごが、カツンと音を立て  
て入り、元通り、ものが言える  
ようになられ、神様からお気づ  
けを頂かれ、怖い思いをされた

人もあつたようです。

又、一人の人は、大変男勝り  
のような女の人で、この人も、  
一度、トヨ親先生に関わるよう  
な横着を言われた人があり、ト  
ヨ親先生も、皆と話をされるの  
を聞いておられたが、その晩帰  
られ、毎朝お参りをされる人だ  
つたのですが、朝になつても来  
られないのでどうしたのだろう  
かと思つておられると、朝子供  
が参つて来られ、

「お母ちゃんは夕べ教会から帰  
ると、足が立たなくなり寝てい  
るから来られない。」

と言うことなので、トヨ親先生  
も、それでは困るだろうと思わ  
れ、

「心の中で悪かったと思い、お  
詫びを神様に申し上げるよう  
に。」

と、使いに言付けられ、その人  
も早速、

「本当に言い過ぎた。」  
と反省させられ、神様にお詫び

をされると、立てなかつた足が、  
おかげですぐ立たせて頂けるよ  
うにお気づけを頂き、神様の恐  
ろしい面もそれぞれに見せても  
らわれ、素直な心で信心の稽古  
をせねばならないのだというこ  
とを身をもつて分からされた人  
もありました。

私もそういうことも聞かせて  
頂き、ありがたいと思わせて頂  
いたことでありました。

本当に神様はどのようなこと  
も、みな人間の言つたり、行い  
に現したりすること、見抜き見  
通しで、生きてお働き下さつて  
あるのだということ、心から  
ありがたい、恐れ多いことだと  
思わせて頂くのであります。

この方達の事は、少数の人達  
の事です、外にも沢山の人達  
がトヨ親先生の御取次御祈念の  
おかげを頂き、救い助けられて  
いったのであります。

トヨ親先生は、信者さんに難  
儀困りが出来たと御取次がある

と本当に、そのことがおかげを頂けるまでは、寝食忘れて、夜も袴の紐を解かれる事なく、御祈念にお疲れのご様子の時も度々あり、只々氏子かわいい助けて欲しいとの神様へのお詫びお願いの日々であったように思えました。

## 養女をもらわれる 学院入学と病気

教会の方も、昭和二十八年八月五日には、教会増築のおかげを頂かれ、又、娘の美代子も色々と本人の思いがあり、宇佐の方へ布教に出る事になり、土佐高岡教会の後継者として、やはり雷キクノの娘、美代子の妹に当たる登茂子が御神縁を頂く事になり、昭和三十年八月十六日に登茂子（以下は私）、私が初めて土佐高岡教会にお引き寄せを頂いたのであります。

私の事、トヨ親先生が来てほしいと始から言われた訳でなく、私の方が、昭和二十九年四月中

又、トヨ親先生は、青少年育成に心をそそぎ、御祈念をされました。

そして会合を開き、共に青年に、少年少女になられたようなお気持ちで語られ、年に一度は、教外者の子供達にも声をかけられ、そんな時は、トヨ親先生ご

学を卒業して、会社へ就職をしていたのですが、土佐高岡教会のおばさん（トヨ師）の所へどうしても行きたくなくなり、母に、「何とか高岡（土佐高岡教会の略称）へ行けるようにおばさんに頼んでもらいたい、女中さんでも何でもいいから。」と頼み、母（雷キクノの事、以下は母）は困って、トヨ親先生には何にもそんなお話がないがと言っていました。が、どういう事なのか、その時の私には、只、気持ちに心が土佐高岡教会に走って行っている様な状態で、母

自身も子供になりきられたようなご様子で、いろいろの行事に加わられて、皆で楽しい一時を過ごされたりされていたお姿を今も思い起こされるのであります。

は、「お前がそんなに言うのなら、一度親先生にその気持ちを話してみようか。」  
と言ってもらい、まだ一度も行った事もないのに、天にも昇るような気持ちで、トヨ親先生のお返事を待っていました。  
そしたら、やっと母から、返事が来てトヨ親先生が、「登茂子がそんなに私の側に来たいのなら、明日からの食べさす物があるか、ないかもわからないが。」  
又、幸せにしてやる事が出

来るかどうかも分からないが来させてみるか。」

と言つて下さったとの事で、私は、只、うれしくて、うれしくてたまらず、早速会社をやめ、来させて頂けるようになり、母は大変喜んでくれましたが父(雷好一以下は父)は反対で、出発には色々ありましたがおかげで私は念願かない、押し掛けて来たような事だったので。

父も後には許して喜んでくれ、ありがたいと思つた事でした。この様な気持ちにならされ色々な事があったのが、神様が私に下さった大きなおかげだったと私は、今その時の事を思わせて頂くのであります。

昭和三十一年九月二十三日には、布教十年の記念祭を御本部より中山亀太郎(なかやまかめたろう)師を講師として御苦勞頂かれ、高岡公民館を借りて、記念講演をして頂かれた事でした。その時のトヨ親先生は、本

当に生き生きと御用しておられました。

トヨ親先生は、私に、「女中として於いてもいけないので、もう何処へも行く気持ちがないのなら、土佐高岡教会にも後継者がいる事だから私の養女になつてくれるか。」と言つて頂き私は、トヨ親先生の養女にして頂いたのであります。

後継者になるには、金光教を卒業して金光教の教師にならせて頂かねばならないからとの事で、昭和三十二年五月私は金光教学院へ入学させて頂く事になり、テストを受ける時も、トヨ親先生は、私が安心してテストが受けられるように思つてついて来て下さり、邪魔にならない所で、御祈念をされていて下さり、そのおかげで私も、無事テストも合格させて頂き、入学させて頂く事が出来たのであります。

私が、金光教学院へ入学させて頂いて一ヶ月たった、六月十日の教団設立記念式(教団独立記念祭の別称)のあつた夜の事です。

昼の祭典には、トヨ親先生も土佐高岡教会から、信者さんと共に参拝され、私も皆に会わせて頂き、皆が帰られた後、学院生も、その日の御用を終え皆がほつとして休ませて頂いた夜の事です。

丁度、学院生が大勢、風邪にかかりはしておられたのですが、私も夜中になり何か寒気がして、熱を計ると四十度近くもあり、その風邪が元で体が腫れてきて、顔も目など開いているのかいなののか判らないくらい、青白く腫れ上がって医師に見て頂きましたら、急性腎臓炎で命が亡いかも判らないとの事でありました。

講師の先生や学院生の方が早くトヨ親先生に知らせ、来て頂

き、会わさねばならないとの事で電報や手紙で知らせて下さいました。

そして、私に、

「もうお母さん（トヨ師）が着て下さるから、元気を出して待っていなさいよ。」

と毎日、汽車が着く度に言つて下さり、私も入学して間も無い時でありますから、又、友達ともあまりなれていなかっただけです。トヨ親先生、母は何をおいても飛んで来てくれるものと信じて、早く来てくれる事だけを今か今かと待ち焦がれていました。

けれどトヨ親先生、母は飛んで来てくれません。

そのかわりに、手紙が学院に来ました。

その中に、

「私（手紙内容ではトヨ師のこと）にとつては只一人の可愛い子供ではありませんが、教会では氏子の方の命をあずかっている

様な御用をさせて頂いている私であります。

子供の命が亡くなるかも分らないといつて、親子の情に溺れ、私がそちらに行つて、子供の看護をしている間に、氏子の方にとの様な問題の人、病氣の人、困る人が出てくるか分かりません。

その時には、取次者としての御用がまつとう出来ません。

御用の方が大切でございませぬので、又、私が行つてついでにも子供の命を助ける事が出来ませぬので、私はこちらで、神様に一心に御願いさせて頂いて信心を進めさせて頂きますので、子供の事は、ご迷惑ではございませぬが、先生方皆さんの方でよろしくお願い致します。」との内容の手紙であつたそうです。

先生方は、

「やっぱり血を分けた親子でないから、その様な事であるのか。」

と思われたらしく、又、私もその時は、御道の御用がどれほど重大な事であるかという事も、親先生、母の信心、本心が何処にあるのかも分かりませんから、「本当の血を分けた親でないから、来てくれないのか。」

私がこれほど待ち焦がれている事が分からないのであろうか。」

と親の心を疑い、淋しさのあまり涙が止めども無く流れ、毎日物思いに沈んで養生させてもらつていました。

そんな時、高知教会の政治郎親先生が御本部の御用で御出でになり、私の所へも見舞いに来て下さいました。

その時の政治郎親先生のお話

に、  
「お母さん（トヨ師）は、あんなの事を心配して改めて、御本部の金光様と、高知親教会へ、毎日手紙で御取次を願つて、信心を進められ、なんとかしてお

かげを頂き助けて頂きたいとの  
思いで一生懸命である。

昼間御用が忙しくて手紙の書  
けない時は、夜一時、二時にな  
っても、その日の御取次の手紙  
を出してからでないといまな  
い。」  
とのお話を聞かせて下さいまし  
た。

それを聞かせて頂いて、私は  
その時、十八歳でしたが、なん  
という恩知らずな思いをトヨ親  
先生、母にしていた事なのか、  
トヨ親先生、母の心を知らない  
で、私の事をそこまで思ってい  
て下さったのかと、今更乍、自  
分の浅はかな心が恨めしく思え、  
「あんな事を思わなかったらよ  
かったのに。」  
と反省させられ、今度は、トヨ  
親先生、母に、  
「ごめんなさい。」  
と心からの相済まない涙がほほ  
をつたい、どのように切られて

も切られない様な思いが、泉の  
ように私の心に湧き出て来まし  
た。

その内に、トヨ親先生、母の  
所から、毎日私の所へ御本部の  
金光様と高知教会の政治郎親先  
生よりお下げ頂いた御神米を送  
つて下さり、私はその御神米を  
毎日頂かせて頂くようになり、  
体全体の腫れも、毎日目に見え  
て、薄紙を剥ぐ如くに無くなり、  
医師もびっくりされ、学院の先  
生方も今度は、  
「やっぱり親先生（トヨ師）の  
ご信心は違うのだなあ有難い事  
だ。」  
と大変喜んで下さり、命が亡い  
と言われたその病気も一週間で  
おかげ頂き、後二十日ほどは用  
心のため休ませて頂き、すつか  
り全快させて頂き、神様、金光  
様、親先生の御徳で命のおかげ  
を頂かせて頂いたのであります。  
その間に月参の日がこられて、

トヨ親先生、母も信者さんと共  
に来て下さり、私が元氣におか  
げを頂いたので、大変喜んで下  
さいました。

その時、  
「土佐高岡教会のお広前のお下  
がりだ。」

と言われ、スイカは腎臓に良い  
との事で重たく荷物になるのを  
省みず、持って来て下さり、私  
を病氣中お世話して下さい、  
学院生の人達にも別けて下さり、  
皆が喜んで頂かせて頂いた事を、  
今も忘れることが出来ません。

私の事を思っていて下さらな  
かったら、出来なかった事だと  
思わせて頂くのであります。

そして、昭和三十三年四月、  
元氣で学院を卒業させて頂く事  
が出来、その年はまだ歳が足り  
ないとの事で、昭和三十四年六  
月、おかげを頂き、金光教の教  
師としてお取立てを頂く事が出  
来たのであります。

## 親先生、母、主人と別れられる（死別） 霊様となられ、ご夫婦に

昭和三十三年一月十九日、私が学院中で留守中の事、トヨ親先生、母の主人であった人、岡本徳一が亡くなった時の事であります。

トヨ親先生、母が二階で一人で休んでおられ、朝起きられる前の事、独りで襖の戸が、スウーと開き、真っ黒い大きな体の人が、顔はその時は判らなかつたとの事でしたが、その影のような人が布団の裾を捲って入り、覆い被さるようになされ、重たく感じられ、これは大変だと思われ、

「金光様、金光様。」と一心にお願いされていると、その影のような人がパツと飛び退いて出て行ったとの事で、気が付いて見られると、びっしょり汗をかいておられたという事です。

目が開いていたのに不思議な

事もあるものだと思われていると、その朝、愛媛県の城辺町に住む雷キクノから電報が届き、岡本徳一死すと来たそうです。

トヨ親先生、母は、やっぱり二十六歳で主人、徳一と別れる間際、死んだらお前の所へ行くと言った約束を守って、息を引き取るとすぐ私の所へ来たのだなあと思われ、御本部へ御参拝され、その事を三代金光様に御取次申し上げられると三代金光様は、  
「貴女の主人に間違いはありません。」

これからは、土佐高岡教会の霊舎で主人としてお祭りして上げなさい。」

とおっしゃって下さり、母（以下はトヨ師の事）は主人岡本徳一、六十三歳と死別されたのですが、又、霊様になられ、やつと主人として、私の父（以下は

徳一の事）として、家族として暮らさせて頂けるようになり、父の霊様もさぞかしほつとされておられることであろうと有難く思わせて頂くのであります。

父は、生前中は、トヨ親先生、母の前に姿を現わし邪魔をされるような事は絶対されませんでした。

蔭ながら母の幸せを願い、時には、御本部の御大祭の時など、御装束をつけられ、御用されておられる姿を、判らない様に遠くからながめ元気で御用出来ている事を安心して帰って行つたと言います。

又、自分には別れていても妻がいると言って、外の女の人には一生目を向けられなかつたと言います。

その話を聞かせて頂いて、父は本当に心から母を愛し、愛すればこそ、母を自由にあげ

られる事が出来たのだと思います。  
す。

偉かったなあと感動させられ

## 養母との別れ

昭和三十三年四月二十日、私  
が元気のおかげ頂き金光教学院  
を無事卒業させて頂いたその年、  
五月二十五日の事です。

松山の市役所より電報が来ま  
した。

何の電報かと思ひ、不思議に  
思つて開いてみると、

『野村千代江死す引取りに来い』  
との電報だったのです。

トヨ親先生、母が一度も見た  
事のない人ではあるが、九歳の  
年、籍だけ親子になつていた養  
母で、心密かに捜し続けておら  
れたのですが、なかなか分から  
ずにいたその人の死の知らせだ  
ったのです。

愛媛県の松山に住んで居られ  
たとの事だったのです。

普通の人だったら、籍が入つ

ると共に、約束は、何十年立つ  
ても守らねばならない事は守り  
通したという、父も母も、尊く

ていただけで、一度も見た事も、  
写真ですら見た事もない人で  
から、連れに行くような人も余  
り無い事と思ひますが、トヨ親  
先生、母は、

「籍が入っているだけでも縁  
があつたのだから、死なれたか  
ら連れに来るようにと知らせを  
頂いた事は、本当に有難い事だ、  
松山と高岡とで、余り遠くでも  
ないのに、生きている間に分か  
つていけば、子としてお世話も  
させて頂けたのに。」

と言われ、養母である野村千代  
江の遺骨を迎えに松山へ一人で  
行かれ、お葬式万事を松山の市  
役所の人や、近所の人達と共に  
無事済まされ、その人達も、

「貴女のような人と分かつてい  
れば、生きておられる間に知ら

嬉しく思わせて頂きました。

せてあげればよかつた。

残念だった。」

と言つて下さり、その人達の言  
われるのに、

「千代江さんの籍には、子供が  
一人ついているから、その人に  
知らせてあげようか。」

と言うと、千代江さんは、

「子供だと言つても、籍が入つ  
ているだけで一度も見たことも  
ない、それゆえ一杯のご飯も親  
として食べさせて大きくした子  
供でないから、世話をかけに行  
く訳にはいけない。」

と言うものだから、命のある間  
によう知らさなかつたと悔しが  
つて下さつたとの事で、野村千  
代江のおばあちゃんは、大変几  
帳面なかつちりした人で、余り  
他人の人に迷惑をかけられる事

もなく、九十歳で死なれたという事でした。

その様な事で、千代江おばあちゃんの遺骨をトヨ親先生、母は抱いて帰られました。

千代江おばあちゃんは、仏教でお葬式もされていたので、八月には、初盆も心ばかり私と二人でさせて頂き、千代江おばあちゃんの遺言があつたので、その遺言とは、千代江おばあちゃんには東京にお嫁に行っていた妹、ユキさんという人があり、その人達夫婦にも子供さんが無く、共に二人共亡くなつていて、後をみる人もいないのでお寺でみてもらつてゐるとの事で、生きておる間に姉妹で話し合いが出来ていて、死んだら妹夫婦のお祭りしてもらつてゐるお寺、本授寺のお墓へ共に遺骨を納めてもらい、そのお寺で永代祭つてもらいたいとの事でありました。

それで、トヨ親先生は九月四

日、五日の御本部月参の時、私も共に、参拝のおかげを頂き、その足で、千代江おばあちゃん

の遺骨を抱いて、東京へ行って来ようという事になり出発しました。

その途中、高松の船の中でトヨ親先生が急に病気になり、動けなくなられ、信者さんも共にお参りされるとの事で一諸だつたが、私も千代江おばあちゃん

の遺骨を抱いてゐるし、困り

方にくれましたが、私がしつかりしておかげを頂かねばと気持ちを取り直し、神様、金光様に

心の中で一心にお願いさせて頂き、船から汽車に乗り換える時

も、乗務員の人達がタンカに乗せて汽車に乗せて下さり、茶屋

町で降り、そこから金光までハイヤーに乗り行かせてもらった

事でしたが、その時の気持ちは

今思い出しても、通る人も皆眺められるし、気の薄れかけてい

かれるトヨ親先生、母に私は、

「もうすぐ御本部に着くからしつかりして。」

と呼び続け、どうなることなのであろうかと、不安と困りと入り乱れた思いで、やっと金光に着き、真光園の旅館(現在は公園)

に宿を取らせて頂き、医師に診て頂きますと、

「安静にして休ませておくように。」

と言われました。

しかし、千代江おばあちゃんを東京へ連れて行く途中だったため私もどうして良いか分からず、困りいつて、三代金光様に

御取次御願いに参りました。

「金光様、只今月参でお参りさせて頂く事が出来ましてありがとうございます。」

先日、五月二十五日、親先生

の養母に当たられるおばあちゃんが亡くなりました、遺言で東京のお寺にお祭りされている妹

さんの所へ行きたいとの事で、親先生と共に、御本部の月参を

させて頂いて御礼を申し、それから遺言のようにおばあちゃんを東京のお寺に連れて行かせて頂こうと教会を出させて頂きましたが、途中より親先生がご病気になるれ、医師も安静にするようにとの事で、親先生のご病気が重態のように見え、今親先生にもしもの事があれば、土佐高岡教会の氏子が助からないようになりません。

誰かが死なねばならないのでございまして、私は学院を卒業させて頂いたばかりで、信心の事は何にも分かっていませんし御用にならないと思います。どうぞ今私の命に変えて頂いても結構ですので、どうぞ親先生、母の命を助けて頂きとうございませす。

又おばあちゃんはどうさせて頂いたらよろしゅうございませすようか。」

と涙ながらに御取次御願いさせて頂きました。

三代金光様は学院出たばかりの信心の出来ていない私の困りいつての願いを、じつとお聞き下さつて、私の固くなつて居る心をほぐそうとなさつて下さつたのか、にこにこお笑いになつて、

「親先生の病気はおかげ頂けますから、心配しないでおばあちゃんの遺言通り、親先生と二人で東京へ連れて行って上げなさい。」

とおっしゃつて下さいました。

私は張り詰めていた心が緩み、涙が溢れ出て、ああ良かったと心から御礼申し上げ、旅館へ帰つて金光様の御言葉をトヨ親先生、母に話すと、トヨ親先生は、「金光様がそうおっしゃつて下さつたのなれば、もう心配する事はない、今夜の夜行列車で東京へ行かせてもらおう。」

と言う事になり、信者さんには皆、高岡（以下は土佐市高岡町の事）へ帰つて頂き、トヨ親先

生と私は旅館でおかゆを瓶に詰めてもらい、梅干しのおかずのお弁当を作ってもらい、私は、片手に千代江おばあちゃんの遺骨を抱かせて頂き、片方の手でトヨ親先生、母を抱き抱える様にして、御広前に御礼に行かせて頂きました。

そして、丁度その時、高知教会道願政治郎親先生が御本部で御用されていた時だったので、政治郎親先生の所へも御挨拶に行かせて頂いた。

政治郎親先生は、

「それで東京まで行けるのか。」

と言われ、大変御心配下さり、又、御本部の出た所で丁度御広前に御参拝されようとしていた、岩手県盛岡教会の藤彦五郎先生にもお会いさせて頂き、御心配して下さつてある御様子でしたが、トヨ親先生と私は、金光から玉島へ汽車で出て、夜行の玉島から東京行きの列車に乗って行きました。

明くる日の昼前おかげで初めて見る東京へ無事着かせて頂き、教えて頂いた所を歩いて探して探してやっとお寺、本授寺へ着かせて頂きました。

そして住職さんに千代江おばあちゃんの事色々お話申し上げると、住職さんも、

「まあ、こんなお話しは夢みたいな話だ、浦島太郎だ。」  
と言われ、千代江おばあちゃんのお葬式を二時間余りかけて丁寧にして下さり、その後食事に生まれて初めて、トヨ親先生、母と私はお寺の奥様が出して下さったうなぎのかば焼きをごちそうになりました。

又、住職さんが、  
「せっかく東京まで出て来たのだから、ハイヤーで私が東京をご案内するから見て帰られるように。」  
と言つて下さいましたが、御用もありますし、その時、住職さんに、

「これからは、こちらには、ようお詣りさせて頂きますせんが、私共も金光教の教師として、教会で御用させて頂いておりますので、私共は私共として、教会でおばあちゃんをお祭りさせて頂いて行きますから。」

とお話をし、千代江おばあちゃんの遺骨は妹さん達ご夫婦の真ん中に納める所を作つて下さつてありましたので、そこへ納めさせて頂いて、お別れをして、その晩の夜行に乗り、明くる日無事、高岡へ帰り着かせて頂き、トヨ親先生、母の病気も、神様、金光様、政治郎親先生のお祈りを頂き、全快のおかげを頂き、九月九日の御月次祭（月例祭の旧名）も明くる日無事お仕えさせて頂いた事でした。  
私やトヨ親先生には、神様が本当に生き生きと御働き下さつてあるのだなあとおつくづく有難くうれしく思わせて頂いた事でした。

この様な事があつてしばらく立つたある晩の事、私は千代江おばあちゃんと思われる人の夢を見せて頂き、それも、三回に別けて一晩の間に見せてもらったのです。

始めは、年老いたおばあちゃんが一人、駅の改札口で切符を出してどこかに旅に出る様な格好で、それも風呂敷包みを片方の腕に抱き立つて居る所を見せさせて頂きました。

次に、東京のお寺と思われる祭壇にお祭りしてもらつているお位牌がぼろぼろとそれも一つだけ燃えている所を見せて頂きました。

そして三番目は、土佐高岡教会の御大祭で一人の誰も知らないおばあちゃん、白の割烹衣を着て、せっせとお手伝いの御用をされている所の夢を見せてもらいました。

そこで、私は思わせて頂きました。

一番始めの場面は、千代江おばあちゃんが、遺言の様に東京のお寺に連れて行ってもらったとの事であり、東京のお寺でお祭りしてもらっているが、ここにいるよりも金光教の土佐高岡教会で血は繋がっていなくても子供や孫の側に居る方が良いとの思いで、私を通して二番、三番目の場面の夢を見せて下さつて、今は土佐高岡のお広前で皆と共におかげを頂いているのだというおばあちゃんの思いを、トヨ親先生と私に見せて下さったものと有難く思わせて頂き、今も妹さんご夫婦も共に土佐高岡の霊舎と奥城でお祭りさせて

## 御本部参拝途中での出来事

七月のある暑い日の御本部参拝当日を迎えトヨ親先生と信者さんと共に私も土佐高岡教会を無事出発をしました。

朝倉の駅に着き、皆で切符を買うためトランクから財布を出

頂いているのであります。

神様も霊様も生きてそれぞれにお働き下さり分らせて頂き、気付かせて頂き、有難い事に思わせて頂くのであります。

トヨ親先生は、御本部の月参も欠かされた事は無く、その時病気になるられていても休まれる事は無く、

「行かせて頂いておかげを頂く。」と言われ、無理を通してご参拝になられました。

御本部の御大祭の時は必ず御装束を付けて御用されました。

トヨ親先生のお姿を見せて頂いていると、どんな時も、神様、金光様、政治郎親先生を頂き切

しトヨ親先生は切符を買われた。駅の中には信者さんより外の人

人が二、三人おられた。駅の待合所で汽車の来るのを待っていると、そこへ、トヨ親先生にどうしても合わなければ

つておられる真剣そのままの御用であつたように思われました。

又、良いと思われた事は、「とにかくにも実践に移して信心進めておかげを頂かなくては。」

と言われ、

「どんな時にも困った困ったと人間考えで言つてはいけない。そんな時こそ神様に一心におすがりしていけば神様は必ず道を付けて下さり、助けて下さるから。」  
と申しておられました。

ならない用事が出来たとの事で、宇佐に布教に出ていた姉（以下は美代子の事）が、自転車で息せき切つて朝倉の駅へ駆け付けて来た。

トヨ親先生は、汗をだらだら

流している姉を見られかわいそうに思われて、ケーキでも買って下さろうとして、駅前のお店まで行ってケーキを買って来て下さった。

その時、トランクは待合に置いていたが、その辺りに信者さん達も居られたので、すぐ帰るからと思われてトランクは持たずに店に行かれたのであった。

その間五分も経っていない間に席に置いてあったトランクの所へ帰って来られると、今まであったトランクが無くなっていくではありませんか、その中には信者さんからお預かりしている御本部へのお供え物や、トヨ親先生の羽織から色々入っていたのであります。

これは大変だという事になり、汽車の時間は迫っているし、思いがけない出来事が起こってしまった、駅員さんから始まって皆で探したのである。

トイレの中まで見たがどこにも見当たらないので、駅員さんから、

「警察へも知らせておきますから、判りしだい知らせますので汽車の時間が来ましたから出発して下さい。」

との事で切符は買っていたので皆で汽車に乗り、姉は後で又調べてくれるという事でも出発したのであります。

私共が汽車に乗ってから、又、方々探してくれたとの事でありました。

するとどうでしょう。

あれほど探して無かったというトイレの中にあつたとの事で、汽車に乗っている私達の所にも連絡が入り、中の物にはいっさい手は付けていないとの事で、おかげ頂いたのであります。

姉はトヨ親先生が困って居られるからと思ひ、夜行列車に乗って朝、金光様のお届に間に合

う時間に持つて来てくれました。

おかげで困らずに万事にご都合お繰り合わせ頂き、お届もさせて頂くことが出来、この事があり姉も御本部参拝させて頂く事が出来、本当に有難いおかげを頂いて、高知の駅まで帰って来ますと、警察官が待つていて下さり、その方の言われるのに、「今までこういう事はいくらも取り扱ったが、お金が入っていてそれに手を触れていなかった、何も取られていなかったという様な事は一度もなかったが、泥棒も神様のお金は取れなかったものですね。」

と大変不思議がって下さり、喜んで下さった事でした。

私はその時、トヨ親先生の一心の祈りの尊さをつくづく感じ、有難く思わせて頂いた事でした。

トヨ親先生の御一生の内、物を取られるという様な事は、この時が始めて終わりの様でした。

## 娘の結婚

昭和三十九年四月二十六日ご縁を頂き、私二十五歳の春、養子として須崎教会の在籍教師で、東津野村宮谷の今は亡き父、川田玉義（かわだたまよし）母、吉恵（よしえ）の末息子、川田穎璋（かわだひであき）さんに来て頂く事になり、高知教会先代（三代）道願正信（どうがんだい）

## 孫誕生

昭和四十年二月二十八日、予定より一ヶ月も早く私共夫婦に子供が生まれる事になり、この事についても、私は娘の時、腎臓でこの夜がないかもと医師から言われた時、おかげで全快させて頂いたのですが、その時、「結婚しても子供を生んではないけない、もし子供が出来ても生む時は死を覚悟しておきなさい。」と言われていた私でしたが、ト

まさのぶ）親先生、千文奥様が仲人として御用頂き、結婚式をして頂きました。

トヨ親先生、母は殊の外喜んで下さり、私のような子供の無かった人間に、神様、金光様、親先生の御徳のおかげを頂き、娘が出来、又、息子が出来、こんな嬉しい事はない、私は世界

ヨ親先生は心配する事はない、神様のおかげ頂けば大丈夫だと言って私を励まして下さり、神様の教えの通りおかげ頂いて、無事長女を安産させて頂いたのであります。

自宅で医師に来て頂き、お産をさせて頂いたものですから、産湯を使わせてもらいますと、トヨ親先生は、すぐ、大事な大事な宝物を抱く様にしっかり胸に生まれたばかりの長女を抱い

の幸福者だと申され、歌を詠まれ、その歌に、

『今日の日のこの喜びを忘れずに信心進めて 良い母となれ』と、色々とお心を配られ、私共に尽くして下さった事を、私は忘れる事は出来ません。

て下さって、御神前に連れて出られ、

「神様のおかげを頂きまして、私（トヨ師）にもこんな可愛い孫をお恵み頂きまして誠にありがとうございます。」

どうぞ元気で御用のお役に立つ氏子に成長させて下さいませ。」と心から嬉しそうに喜んでお礼を申して下さったトヨ親先生のお顔を今も忘れる事が出来ませ

ん。

穎璋さんが御本部参拝させて頂き、四代金光様に御礼を申し上げ、お名前を真子（しんこ）とつけて頂きました。

私共夫婦に御無礼があり、真が足らなかつたのでしよう。

私には沢山母乳を恵んで頂き、真子もお乳は一生懸命飲んでくれるのですが、日が立っても、全然大きく成長せず、産まれた時よりだんだん小さくなっている様に私には見え、病院へ連れて行き医師に診て頂くのですが、どこも悪いようには言われず、産まれて一ヶ月目の三月二十日、発育不全との事で真子は、何の苦しみもない様子で、蠟燭の火が静かに消える時のように、眠るように神様の所へお国替えさせて頂いたのです。

その日、トヨ親先生のお気持ちは、どんなであったであろうかと済まなく思わせて頂くのであります。

どんな時も必ず神様のおかげを頂いて来られたトヨ親先生なのに御自分の孫の命が、私共夫婦が神様の御気感にかなわなかつたため、真子がお取り上げ頂くようなことになり堪らないお気持ちだったであろうと思わせて頂くのであります。

真子がお国替えさせて頂いた夕方、私がいくら機嫌をとつても泣きやまず、困っているとトヨ親先生が来られ、

「ほら、おばあちゃんの所へ来てみ。」

と言われ、真子を抱いて神様にお願ひに行つて下さり、ねんねこにくるんで座られじつと御祈念をし続けて下さいました。

真子も泣くことを止めてきよろきよろ辺りを見ていました。顔が平常より膨れているような気がして、トヨ親先生が、

「お医者さんに電話して来て頂くようにしなさい。」  
と言つて下さり私は医師の手配

をして来て診てもらうようにしました。

真子は、おばあちゃん（トヨ師）に抱かれたまま、目をつぶり、私も寝るのであるうかと思つてみると、スウーと顔色が白くなりだし、お医者さんがすぐ来られた時は、もう虫の息になつていて、

「もうどうしようもない、せつかく大きくなりよつたのにのう。」

と首を横に振られ帰らぬ子になつてしまつたのであります。

父親、穎璋さんは丁度、窪川教会の御大祭に出かけていた留守の事でした。

トヨ親先生、母は、私に死んで行く我が子を抱いてどうしようもなく泣いてしまふ私を可哀相と思われて、せめて自分が抱いてやれば、少しでも気持ちが変わうであろうとの親心のお心配りであったと、私はありがたく思わせて頂いたことでした。

その晩、私はあまりの悲しさに周りの事も考える余裕は無く、自分も一諸に死んで真子の側に行つてやりたいと思ひ詰めていました。

トヨ親先生、母は、その私の悲しんでいる様子を見られ、心まで見抜かれ、何もおつしやらずに、

「お前の気持ちがあつきり決まったら、私に言いなさい、私もお前や、真子と一諸に死んであげるから。」と、それだけ言つて下さいました。

私は、その言葉を聞かせてもらつた時、私は色々迷惑すらかけても、何のお役にも立たないだろうが、トヨ親先生は、命をかけるの御用をされ、おかげを頂かれ、これから先も、御用のお役に立たれ、どれだけの人々が助かつていかれるか、わからないお人を私の我が子可愛さの情に溺れ、浅はかな考え

だけで、トヨ親先生を死の道連れにしてどうなろう。

神様も、お嘆きになり、真子も、誰もお祭りをしてやる人もなくなる。

誰も助からないようになる。

トヨ親先生の今日までのご苦労を水の泡にして、恩を仇で返すことになる、ハツと気づかされ、どんなに悲しくても、私が死を思い止まらねばと、自分に言い聞かし、思い変えさせて頂き、トヨ親先生の命をかけるの御取次により、私も又命のおかけを頂き、真子のお葬式を、高知教会先代（二代）道願政治郎親先生が御祭主下さり、無事済まさせて頂いたことでした。

トヨ親先生、母は、この度ほど、悲しく辛かった事は無かつたと共に真子の死を悲しんで下さいました。

又、その年、次の子供をおかげ頂き、五ヶ月になった時のこ

とです。

八月二十五日、今日は、丁度犬の日に当たるから、腹帯をせねばならないと言われ、私は、真子の時は、神様のおかげを頂かなくてはと教えの通り、腹帯をしないで、おかげを頂いたのですが、今度もそうさせて頂けばいいと思つていたので、色々身内の者が、世間並みの事をしないから、真子は死んだのだから、今度は、どうしても腹帯をしなければならぬと言われるので、そのことで、又色々家庭の中が、もめてもいけないと言う事で、トヨ親先生、母が腹帯を買つて来て下さり、夕方、お風呂に入り、夜六時頃、無事腹帯をさせて頂き、休ませてもらいました。

すると、真夜中一時頃、急にお腹が固くなり朝方になって急にお腹が痛みだし、病院へ慌てて連れて行つてもらいましたが、医師は、もう止めようがない、

との事で、子供は死んで流産しました。

又、教祖様の教えに反し、人の言われる事につらされ、私共夫婦が信心を間違っていたので、これから先の助かりにはならない、改めさせねばならないとの神様からのお気付けたったと思うのですが、その様な事で、又、トヨ親先生、母に淋しい辛い思いをさせ申し訳け無く今も思うのであります。

私も二回も自分達夫婦の御無礼からとは言え子供を亡くしたので、私にはもう元気な子供は授からないのであろうかと、悩み悲しみましたが、昭和四十一年神様は、次の子供をお恵み下さいましたので、私も今度は、もう誰の言う事にも耳をかさず、只々、日々金光様、親先生に御取次御願ひ申し上げ、医師にも診て頂かず、腹帯もせず、神様だけでおかげを頂きたく、九ヶ月までならせて頂き、後一ヶ月

という所までおかげを頂いた、ある日の夕食に穎璋さんが、宇佐の御用におかげを頂いていて、お魚のお下がりがあり、これは本当に新しい新鮮なと思うから、一切れでも食べてみたらと、あまりに勧めてくれるもので、たった一切れ、鯖の生の刺身を頂きました。

すると、急に夜中、お腹が痛みだし、私は、今度は、ここまでおかげを頂いて来たのに、大変だと思い、さっそくお医者さんに来て診てもらいましたら、注射をして下さり、痛みを止める手当をして下さいました。

それで、神様のおかげを頂き、本当に有難い事と神様に御礼を申し上げ、私も今度こそ元気な子供をおかけ頂きたいと、大きなお腹をかかえ、毎日御神米を頂き乍、丁度教会の年記祭の年でもありましたので、今日まで頂いたおかげを神様に御礼申し上げますたく、その現れとしてトヨ

親先生の御教え、私の頂いたおかげを自分の手で小冊子に書かせて頂きたいと思い、明けても暮れても、神様、金光様、親先生に御取次御願ひ申し上げ、只々一心に書き続けました。

四十冊目が出来上がった時、トヨ親先生が、

「今日は八月五日、三代金光様の御誕生日のお日柄でもあり、御本部では、少年少女の全国大会の当日でもあるが、四十冊目も出来上がったので、もう書かせて頂く事は止めにして、神様に今日までの御礼を申し上げます。今日明日にでも元気な子供を無事安産させて頂きたいものだね。」  
と言われ、私もそうならさせて頂けば有難い事だと思わせて頂き、後かたづけをさせて頂いて、神様、金光様、親先生に今日までのお礼を申し上げます、その晩はやれやれと一安心して、ゆっくりに安眠させて頂き、明くる朝、

八月六日の四時の御祈念に何事もなく、無事元気に起こして頂き、トヨ親先生、皆様と共に四時の御祈念のおかげを頂き、信者さんも帰られ、私もうつむけないので、二階の洗面所で洗濯をしようと思ひ、これから洗おうとした瞬間、お腹も痛まずに、羊水が出た感じがして、慌ててトヨ親先生、母を呼び、休む間もなく、医師も呼びに行ってもらったが間に合わないところで、わずか十五分間位の間にトヨ親先生、母の取り上げで、六時頃元気な男の子が、おかげで生まれさせて頂き、丁度そこへ医師が来て下さり、産湯を使わせて下さって、神様の御教え通り、隣知らずの安産のおかげを頂いたのであります。

その時は、トヨ親先生、母も大変喜んで下さり、名前も真二（しんじ）とつけて下さり、真二、真二と大変可愛がって下さり、共にお世話して下さいまし

た。

トヨ親先生は、五ヶ月で流産した子供に真一（しんいち）とつけて下さり、お祭りして下さいであるので、生きた子供では長男であるが、二人目の男の子なので、金光様が長女につけて下さった名前が生きて、お役に立てる事が出来無かったので、真二とつけて下さったのであります。

真二の体質は、アレルギーで弱い体質でありました。

一年半頃から、小児喘息になりましたが、神様、金光様、親先生の御徳のおかげを頂き、無事成長させて頂き、真二が四歳になった時、昭和四十六年八月十七日、子供のお恵みを頂き、真二と同じく、教祖様の御教え通り、腹帯もせず、神様、金光様、親先生の御取次御祈念のおかげを頂きました。三時間位で、トヨ親先生、母の取り上げを頂き、医師も間に合わないところ

で、手の中に安産で生まれ落ち、首にへそのおが巻いていたことと、慌てて外して頂き、命のおかげを頂かせて頂き、お広前に信者さんが参拝されていたので、顕璋さんは、御用させて頂いていて真二が色々、子供乍、お父さんに知らせに行ったり、二階を上ったり下りたりして、活躍をしてくれ、その中に弟が生まれ、お兄さんになったので、びっくりして眺めています。

その様な中で、お医者さんも間に合わず、六時頃、おかげを頂き、産湯を使わせて頂いたよゆうな事でありました。

トヨ親先生が、高知教会、道願政治郎親先生の一字を頂き、清治（きよはる）と名前をつけて下さいました。

清治が生まれるようになってから、トヨ親先生は、お体の方が悪い所があり、少し口が話しくなくなっておられたりして軽

い中風のような感じがしておられたのですが、七月には、私のお産のために、わざわざ、日帰りで御本部にお参りして下さったりして、そのおかげで、私は二人の子供をお恵み頂いたのである

## 御造営

御本部の御造営が始まってからは、トヨ親先生は、その事に全力を上げられ、教会の御造営は御本部が成就されてからだと思われ、又、氏子の所が先に家が建て上がり、最後に教会をという願いの元に、おかげ頂かれ、最後の力を振り絞られるような

清治が一年二ヶ月、真二が満五歳になった秋の御本部の教祖大祭に、その年は、十月四日の参拜日になっていて、昭和四十七年十月三日に家族一同、参拜者一同共に貸切りバスで参拝さ

ります。

トヨ親先生は命をかけて、私共親子のために、御祈念して下さい、お世話下さったのであります。

命のあられる限り、真二、清

ところで、土佐高岡教会の御造営が始まり棟が上がった時には、本当に喜ばれたご様子で、まだ仕上がりになっていない教会を、トヨ親先生と私で色々語らい見せて頂いたことでした。そして、昭和四十七年三月五日いよいよ願いに願っておかげ

せて頂きました。その時のトヨ親先生は、私は、お体の方もおかげ頂いておられる様で、うれしく色々話をさせて頂き乍、道中も、トヨ親先生は子供の世話も共にして下さい

治を可愛がって共に育てて下さいました。

私は本当に有難い、勿体無い事だと思わせて頂いて下ります。

頂いた土佐高岡教会が、出来上がったのお祭りの時は、トヨ親先生も、私共も信者さんも、皆有難く、うれしく、涙ながらに神様、金光様、親先生に御礼を申し上げさせて頂き、生涯忘れぬ事の出来ない、おかげの日になったのであります。

さり、果物の葡萄が神様のお下がりであり、持たせて頂いて下さりましたら、それを清治に汁を吸わせて下さったり、真二と色々して遊んで下さったり、船の中で、トヨ親先生が清治を抱い

## 親先生、最後の御本部参拝

て下さってあつたのですが、清治が動いて動いて暴れるものですから、膝から、ずり落ちそうになつたりして、それを落とすにはならないと、一生懸命抱いて下さつてある所を写真に撮つてもらつたりしているのを、今見せてもらうと、その時の事が、

## 親先生と最後の語り御用

四日、御本部参拝より帰宅させて頂いた夜、清治と真二が眠りについた後、トヨ親先生は、私に、

「げこう祝いだ。」

と言われ、神様のお下がりのお酒を、杯について下さり、

「今日は本当によかつたね。」

と言われ、私に、

「私（トヨ師）は二十四歳の時に命の亡きところを神様に助けて頂き数え年七十歳の今日まで、自分のしたい事はみなさせて頂き、子供のなかつた自分が、子供をお授け頂き、孫まで恵まれ、

色々懐かしく思い浮かんでくるのであります。

御本部へ着かせて頂いてからも、お元気そうで、無事お装束をお着けになつて御用され、トヨ親先生も、  
「今度の参拝はとっても気持ちのよいお参りであつた。」

いつお国替えさせて頂いても、何の思い残す事もない、私が死んだら、お前も泣いたりせずに、お祝いで送り出してくれよ。」  
と言われました。

私は、

「まだそんな話はせんとおいて、お母ちゃんが死んだら私は泣くぞね。」

と二人でそんな話を何思わずして休ませて頂きました。

その時の私には、何もわからなかつたのですが、トヨ親先生には、神様が、それとなくお知らせになつておられ、私に、そ

と喜ばれ、皆と共に元気で帰られました。

私は、このお参りが、その時は最後のご参拝になられるとは夢にも思いませんでした。

神様のみ、御存じの事であられたのでしよう。

のようなお話をされたのかなあと、今にして思わせて頂くのであります。

十月五日は平日と変わり無く、朝から御用され夜も十時頃まで、丁度、その晩、一人の信者さんが参拝されていて、御結界より色々お話をされ、その人が帰られてから、私に、

「明日はどうしても夏物から合い物に着替えをしたいから、着替えをきちんとしておいてね、朝起きたら、すぐに着替えられるようにね。」  
と言われ、私もトヨ親先生は、

いつもきちんと正装した身仕度をされておられる人なのでその事は、いつも心にかけて御用させて頂いていたのですが、丁度その時は、御本部参拝の事や、子供の世話におわれて、早くトヨ親先生の衣替えと思いつたので、その事が遅くなっていたので、私も、済まなかったと思いつたので、子供を寝かしつけて、二階で着

## 親先生、母とのお別れ

昭和四十七年十月六日、この朝もトヨ親先生は平常と変わり無く起きられ、朝の御祈念から皆と共に御用され、御用の合間には、真二とお広前で遊んで下さり、丁度その時、真二がお下りのビスケットのお菓子を保持っていて、

「ばあちゃんにもあげる。」  
と言って、トヨ親先生の手の中に入れると、にこにこされて、「ありがとう。」  
と言われ、ご自身が食べられた

物にアイロンをかけ仕上げにして、これで朝起きられたら、すぐ衣替えをしてもらう事が出来ると思いつき、ほつとした所へ、トヨ親先生が、その日の御札の御祈念も終えられ、二階に上がって来られて、  
「無理言つて済まなかったね。」  
と、思いつきの言葉をかけて下さり、私も、

振りをされ、着物の袂に入れられ、後で真二が無くなったら、又、やつて下さろうとのお心で、少し背中を丸められ、真二を遊んで下さった最後のお姿を今も目をつむれば、その時の事が、目に浮かんで来るような気がするものであります。

私には、トヨ親先生との最後の日の事は、昨日の事のように思いつき、忘れぬ事は出来ないのであります。  
昼前、宇佐から、高知へ行つ

「遅くなつてごめんさい、枕元に揃えてあるから朝起きたら着替えてね。」  
と言いつき、トヨ親先生も、  
「ありがとう。」  
と言われ、私も良かったと思いつたので、その晩は何事もなく皆で休ませて頂いたことでした。

ている一人のご信者さんが参拝されていつ、トヨ親先生は、その人と色々元気にお話をされ、御結界より御取次の御用をされ、十二時五分前にその人が帰られたので、私がトヨ親先生に、  
「お昼のお食事にしましょうか。」  
と言いつき、トヨ親先生は、

「それなら、私は先にお便所に行つて来ようか。」  
と言いつき、いつもの様に何事も無い元気な足取りでお便所に

入られたのであります。

私は、お茶わんなど、お膳に持って行こうと支度をしていると、お便所の中から何か言われている様なかすかな声が聞こえたので、何か用事なんだろうかと思ひ、お便所の方へ私が行こうとすると、もう一っぺん声が聞こえ今度は先程より少しはつきりした言い方で、

「気分が悪い。」

と言われたので、今、気持ち良さそうに元気に入られたのに、どうされたんだろうと思ひ、びつくりして、

「あげそうなの。」

と聞くと、

「うん。」

と言われるので、慌てて入れ物を持って行き、

「お便所の外に出たら。」

と言うと、

「よう立たない。」

と言われるので、手伝ってお便所から、はい出してもらひ、頼

璋さんに、

「早く来て。」

と呼び、トヨ親先生、母の顔を見せてもらった時は、顔も又、体全体から力が抜けてしまったような、だらりとなった様子なので、

「これはいかん、まあ座敷に連れていこう。」

ということになったが、二階のトヨ親先生、母の部屋まではとうてい行けるような状態で無かつたので、下の御結界の後ろの部屋に、布団を敷いて休んで頂いた、でも体が何だか冷たい感じがして、布団を掛けると、軽い布団なのに、

「重いから掛けないで。」

と言われるので、胸には掛けない様にして、胸から下にだけ掛けて、

「お医者さんに来て頂こう。」

と言うと、

「心配する事はない、しばらく休んだら良くなるから。」

と言われるので、トヨ親先生、母の側で私は神様に一心にお願いさせて頂いていたが、トヨ親先生、母の体は、冷たくなったまま、暖かくならないので、私は心配のあまり、

「やっぱり一度お医者さんに来て頂こうや。」

と言いますと、

「そんなら、お前の言う様に診て頂こうか。」

と言われたので、慌てて、伊藤（いとう）先生に来て頂き、診て頂きましたところ、

「これは大変だ身内の者に知らさねばならない所があれば、皆早く知らせ。」

と言われ、リンゲルの注射を持って来られ、酸素吸入器を持って来られて手当をして下さいました。

夕方、注射が終わると、ぽーと顔に色が出て、体も大分暖かくなり快方に向かうかの様に見えたが、私は、知らさねばなら

ない所は知らさせて頂き、心配で心配で、気持ちが高ぶり、只、おろおろして、

「金光様、金光様助けて下さい。」と一心にお願いさせて頂き乍、トヨ親先生、母に、

「死なないで、死なないで。」と言いつける私の心を見ぬいてか、悪くなられてから、一度も目は開かれなかつたが、

「死にはせん、小さな子供を連れてお前に世話をかけるような事になるかも判らないが、死にはせんから、心配はいらん。」と反対に私の心を落ち着けようと言葉をかけて下さり、私も、「寝るようになってでも構わないから、私が世話をさせてもらうから、生きていて。」とすがり付くような気持ちで言った。

私はそんな事で、トヨ親先生の方がご病気の中から心を使われ、お医者さんが、目を診られるのに、懐中電灯はと言われる

とはつきりされた口調で、「私の部屋のタンスの二番目の引き出しの中にあるから取って来なさい。」

と言われるので、行って見ると、言われた通りの所にきちんと入っていて、持って下り、医師に渡して診て頂いた。

そのような事で、お水を飲んで頂くのに、吸い飲みがいると言われると、どこそこにあるからと言つて下さり、頭はとつてもはつきりされていて、気持ちは、最後まで、しっかりとしておられ私が困らないように教え導いて下さった。

その様な状態だったので、医師も、

「一時はもういかんと思つたけれど、もう大丈夫だろう。」

と言われ、酸素吸入器も外され、注射を持って帰られ、時間は七時半過ぎていた。

高知教会へも御取次御願ひしであつたので、若先生（四代の

道願正道（どうがんまさみち）親先生）が、びっくりしてモーターで来て下さった。

すると、トヨ親先生、母は、正道若先生に、はつきりした口調で、

「ご心配おかけしてすみませんでした。」

もう大丈夫ですから、遅くありませんから、お帰り下さいませ、帰られましたら、奥様や皆様におよろしくお伝え下さいませ。」と目は開けられなかつたが、「ご遠方の所ありがとうございます。」とお礼を申し上げられた。

私が、

「御神米を頂くかね。」

と言いますと、

「うん。」  
と言つて口を開けられたので、口の中に御神米を入れさせて頂くと、噛まれておられる様子で、口を動かしておられたが、急に気分が悪そうにされたので、洗

面器で受けようとしたが、何も出ず、お医者さんが帰られたばかりだった。又慌てて呼びに行ってもらい、慌てて来て下さり、手当をして下さいました。トヨ親先生、母は、今まで言葉をかけて下さってあったのに、さつと顔色が変わられ、医師も慌てて心臓を押ししたり、色々又手当をして下さろうとしたが、最後は何の苦しみもない様子で、眠られる様に息を引き取られ、医師も黙って首を振られ、お国替えになられたのであります。

時間は丁度八時の御祈念中で午後八時二十分頃でありました。私にとって生涯忘れる事の出来ない悲しい日になりました。

御年は数え年七十歳(満六十九歳)でありました。

その時の私の気持ちは、一人谷底にでも突き落とされたような、何に例え様も無い気がして泣き崩れてしまった様な事でありました。

りました。

高知教会の正道若先生もまだ帰られてなかつたので、後の事につき大変おかげを頂きました。トヨ親先生にとられたら、本当に願ひ通りのお国替えであつたと思ひました。

ほつとされたような、安らかに眠っておられる様なお顔で、私もお国替えになられたのだという事が、実感として思はず、トヨ親先生がお好きだった二階のご自身の部屋に休んで頂き、お顔を見せて頂き、言葉をかけても、お返事が無い、私は回りに人は沢山いて下さつても、心細く不安がこみ上げて来て、茫然と、只々涙がひとりでに流れるだけで、神様、金光様におすがりしていたのはもちろんの事であるが、私はトヨ親先生にすがり切っていたのだなあ、ご心配おかけしていたのだなあ、つくづく思わせて頂き、トヨ親先生がおられて、私が今ここで

おかげ頂かせて頂いているのだと思ひ、お礼やら、今後お霊様としてのトヨ親先生にお願いやらまた、トヨ親先生が亡くなられる前に言つて下さつたお言葉、「私は死なない、お前といつも一緒にいるから、心配する事はない。」

と言つて下さつた事を思い出し、私には、いつもトヨ親先生、母とご一緒だと思わせて頂き、ご葬儀の支度にかからせて頂いた。ご生前中私に色々話して下さいてあつたように支度をさせて頂いた。

色々自分の心に言い聞かせながら御用させて頂いても、ひとりでに涙が溢れて来て、止めようがなく、七日、トヨ親先生は病人として休んで頂いている時、高知教会より千文親奥様がお見舞いに来て下さり、私の顔を見られて、

「あんたがそんなに泣いていたら、お母さんが、助からんぞね。」

と、ご心配おかけする程、泣けた私でした。

トヨ親先生、母と私は神様の

## 親先生の御葬儀

昭和四十七年、十月八日、秋晴れの良いお天気のおかげを頂かれ、身内の者、各教会の先生方、ご信者さん、町内の人、皆沢山来て下さり、午後二時より、教会葬でトヨ親先生の願いであられたように、御奉仕させて頂いた。

教主金光様の御代理として、高橋茂富（たかはししげとみ）師、教務所長代理として、和泉那智夫（いずみなちお）師が御参列下さり、高知親教会からは、道願正道若先生が御祭主で、窪川教会長、谷口鹿市（たにぐちしかいち）師、山田教会長、下元勝重（しももとかつしげ）師、高知上町教会長、道願明子（どろがんあきこ）師、須崎教会長、竹内鶴松（たけうちつるまつ）

おかげで、切られても切れない程の心の結びつきのおかげを頂いていたように思います。

師、豊永教会長、大石秀喜（おおいしひでよし）師、御参列の元に無事御葬儀をお仕えさせて頂く事が出来ました。

午後三時出棺で、高知の火葬場に行かせて頂き、火葬場での御祭りも無事お仕えさせて頂き、十月八日は、トヨ親先生、母の御遺体と最後の御別れをさせて頂き、帰る事になった。

私はお棺の側から離れがたく、薄化粧をされた眠られていられる様な美しいお顔、今にもお目を開けられそうな気がして、お顔を眺めていると、別れがたく、亡きながら立ち尽しているのと、高知上町教会の森本久子（もりもとひさこ）さんが、私を迎えに来て下さり、後ろ髪を引かれるような思いで、お別れをして

金光教の信心のおかげだと思わせて頂きます。

教会に帰らせて頂きました。

トヨ親先生、母は、火葬場にて一晩夜を明かされ明くる日十月九日午前十一時に火葬になられ私共は、午後一時半に御遺骨をお迎えに行かせて頂き、私が抱いてお供させて頂き、最後のお参りを高知教会にさせて頂き、土佐高岡教会に無事帰られました。

そして、五十日祭まで、二階でお祭りをさせて頂くことにし、十日、二十日、三十日、四十日と、それぞれの日に、道願正道若先生が、無事お祭りをお仕えして下さり、十一月二十五日午後一時より、高知親教会、道願正信（どろがんまさのぶ）親先生が始めて御祭主下さり五十日祭を無事お仕え下さり、午後二

時、トヨ親先生がご生前中に建てて下さった奥城へ入られる事になり、その時は、真二に抱いてつれて行ってもらうと言っておられたので真二は、奥城までは五歳のことで無理だと思ひ、土佐高岡教会で真二に抱き始めをさせ、私が替つて抱かせて頂き、お供させて頂いて、トヨ親先生は、土佐高岡教会の納骨堂に墓前祭を済ませ無事納骨させて頂いたのであります。

トヨ親先生、母の御生前の御一生は、無事終えられたのであります。

納骨の日も、寒くもなく、暑くもなく、秋晴れの上天気にお恵まれ、トヨ親先生が御生前中、「私（トヨ師）は、御時候のおくり合わせを頂き人様にあまりご迷惑をかけないところで行かせてもらいたい。」

と話しておられました。最後のお別れのお天気も万事にご都合おくり合わせを頂かれ、願ひ

通りのおかげを頂かれたのであります。

トヨ親先生の御性格は、大変はつきりされた方で何事においても、まがった事、間違つた生き方は嫌いで、真直ぐい生き方をされるお人で良いと思われる事は、時をおかずして、行いに現されるお人であつた。

だからご自分が犠牲になられても、人に迷惑をかけられるような事はされなかつた。

又、何事にも報恩感謝の道を歩まねばならないと言われ、どんな些細な事にも恩を感じられ、感謝を忘れられなかつた。

一は神様、二は親先生、三は信奉者、四はご自分と言われる順にご自分の事は、いつも最後におかれて、御用をされた。

御教えはどこまでも守られ、尊ばれ、実践に移されるお人であつた。

又、道はふまれるが、人に対しては思いやる心があられ、そ

の人の身になつて考えてあげられるお人であつた。

一度約束をし、人が信じられたが、途中で相手の人の心が変わろうとも、変わった事を良い方に解釈され、ご自分は一生でも信じ通され、裏切られるような心は持たれなかつた。

又、物事をされるにも、それはそれ、これはこれ、と一つずつはじめをつけられ、二つを一諸にされるようなやり方はされなかつた。

お金の事にしても、借るという事は嫌いでした。例えば、お店に買い物に行き持ち合わせのお金が少し足りなかつた様な場合、お店の人が、「先生、お金はいつでも構いませんから、品物を持って帰って下さい。」

と言われても、その品物を先に持つて帰るような事はされず、「一度家に帰り、お金を持って品物をもらいに来ますから。」

と言われ、一度家に帰られ、お金を持つてすぐお店へ引き返し、お金を払って品物を買って帰られるというようなお人でありました。

身だしなみは、いつもきちん  
とされ、人が見ているから、見  
ていないからといって変えられ  
る人ではなく、何事にも陰日向  
の無いお人であった。

いつも言われたお言葉の中に、  
「神様にお仕えして御用させて  
頂くという事は、絶対油断も後  
へ振り向く事も出来ない、昔の  
武士が真剣を交えている時の様  
なものだ。」  
とおっしゃり、トヨ親先生ご自  
身もどんな時も、真剣勝負の時  
の様なお気持ちで命をかけて一  
生懸命御用された御一生であら

れたと私は思わせて頂きます。

又、

「金光教の信心をさせて頂いて  
いる者はいつもの、金光教の看板  
を背中にしよっているようなも  
のだから、心して行動をしなく  
てはいけない。」  
と言われていた。

ご自身も生涯その事を実行さ  
れたように思います。

又、御用されている中に、嬉  
しいにつけても悲しいにつけら  
れても、ご自身で頂かれた信心  
の御教えのようなお歌を作られ  
た。

そのように、心の大きいとい  
うか、広いというか、心にゆと  
りを持たれ、くよくよ物事を神  
経質に考えられるというような  
事は絶対無かったように思われ

ます。

人が失敗をしてもそれを責め  
たりせず、

「なつてしまった事は仕方がな  
いから、神様にお詫びをして、  
後のおかげを頂きましょう。」  
と言われ、どこまでも、神様を  
杖に一生涯送られ、何事も神任  
せのご一生であられた。

度々命の亡き所も神様のおか  
げを頂かれ、まさしく神様の御  
働き無くしてトヨ親先生のご一  
生はあられなかつたと思われま  
す。

トヨ親先生の宗教家としての  
生きられ方、御用のなさり方を  
尊く有難く思わせて頂くのであ  
ります。

## 先代野村トヨ親先生の御教えの歌を書かせて頂きます。

一、われ無力 神の恵に 生かさるる

先代の徳 親に救わる

一、天地の 神の恵に

生かされて行く 我ぞうれしき

今日も又

一、金光の道に神縁 受けた時  
四六の若さ 実も結ぶ頃

一、生神の道に病む身も いやされて  
楽しく日々を 神参りする

一、取次の 教えの真 身にしみて  
聞かねば損する 今日御教え

一、年々の 四季の変わりには 身にしめど  
行かねば損する 今日参拝

一、生神の 教えの光 身につけば  
人も助かり 我も助かる

一、信心に 若きも老いも なきものぞ  
腹の中より つれて参れよ

一、神仏を 信ずる人も 多かれど  
我が信ずるは 天地金乃神

一、空襲で 持ち物みなは なくなれど  
神の恵で 命救わる

一、信心は 親に仕へる ものなるぞ  
恩師にまさる 親はなきもの

一、信心は 我を見つめて 行くものぞ  
人のかげ口 言わず語ろう

一、生神の 徳にすがりて どこまでも  
道を守りて ついて行かなん

一、生神は すでに亡き身の この我を  
助け導き 今日私に

一、病む人の 心の奥の 哀しさを  
我が事として 神に祈らん

一、親神の 恵ぞ深し 底知れず  
取次の道 そこを教ゆる

一、我が道は 神も氏子も 生きる道  
我欲なくして 人を尊べ

一、我が道の 真の信心 身につけよ  
身心共に 神のまにまに

一、生神は 人間関係 尊ぶぞ  
心してせよ 人をいためな

一、金光の 真の信心 する人は  
見るべし見よや 我を見つめよ

一、道の友 手を取り合いて 睦まじく  
仲良く進め 助け合いつつ

一、天地の 神の信心 する人は  
昼夜別なく 感謝で暮らせ

一、信心は 生活改善 第一義  
家の人々 尊く仕へ

一、商売は 売り先買い場 心せよ  
真の道は 両方立ち行く

一、何事も 真なくして 立ち行かぬ  
世界の平和 我が家も祈れよ

一、親なくて なんの子供が 生まれよう  
親に仕へよ 孝の道行け

一、子供なく なんの親とも 言われよう  
尊べ子供 宝なりけり

一、主人なく なんで我が身が 妻だろう  
主人のおかげ 妻の価値あり

一、妻なくて なんの主人で あるものか  
妻を愛せよ 男女同一

一、嫁行かば 舅姑 大切に  
夫に仕へよ 嫁の道なり

一、嫁行かば 先祖の墓を 大切に  
先祖祭りを 忘れな春秋

一、天地の 神の御徳の 家屋敷  
粗末に使うな 大切にせよ

一、我が神は 心の中の 穢さを  
見ぬき見通し 洗えよ心

一、我が心 我慢我欲の 固ぞ  
清く正しく 入れかえ努力

一、親と子が 感謝で暮せ 何事も  
思い思われ 思い合いせよ

一、我が命 今日ある事に 感謝せよ  
明日の命は 保証出来まじ

一、大小の 差別をつけず 取次げよ  
海川山野 みな神の広前

一、先覚の 諸師を仰いで 信心を  
先覚諸師は 行き届きあり

一、見るからに 人はおろかに 見ゆるとも  
真かくなよ 己が心に

一、信心に うらとおもての 気をもつな  
一心こそが 神への通路

一、取次を 仰げおかげは ここにあり  
願う心に おかげ半分

一、土地にほれ 夫婦ほれ合い 商売も  
真ですれば 家も栄える

一、今日の日を 家内仲良く 睦まじく  
笑顔で語れ 神の教えを

一、人々の 真の心 神は愛で  
神に通じる 心真心

一、信心は これでよいとは 思うなよ  
まだまだ進め 我が真心

一、我々は 生死共に 神の元  
安心せよや 日々の暮しに

一、かげ口は 我が人格を 落すもの  
いましめて行け 己が心を

一、信心は 御用奉仕が 大切ぞ  
心をみがけ 欲を放して

一、金かさぬ 人の情を うらむより  
我が真で 働いて行け

一、愛情を もとめて腹を 立てるより  
我が愛情を 先に現わせ

一、信徒は 辛い悲しい 良い事も  
親教会へ 取次仰げ

一、御教えに こうらをもやせ いつまでも  
御道栄えて 人が助かる

一、ぐちふそく言うなそれにはおかげなし  
心入れかえ 教えを生かせ

一、衣食住 天地萬物 神の徳  
神の恵は はてしなきもの

一、身ははだか 親もなければ 子供なく  
神の恵みで 親も子もあり

一、取次の 道に生かされ 神徳を  
氏子と語る 今日の還曆

一、今日の日の この喜びを わすれずに  
信心進めて 良い母となれ

一、道のため 死ねと教えて 己れ待つ  
あらしに向う 布教の庭

一、身は野辺の木くずとかしてくつるとも  
道は尊し 教えに行きなん

一、道のため 死ねと教えて 己れ待つ  
布教に向う いばらの道

一、ほのぼのと 明け行く空と 我が金光教  
時の立つほど 光輝く おみち

一、金光様よありがとう  
金光様よありがとう

今日は二六の元旦日  
楽しく御祝い出来るのは  
金光様のおかげです

世界のために  
世界の平和を祈られる  
金光様のおかげです

金光様よありがとう  
金光様よありがとう  
金光様よありがとう

二、

初の御用の二日日を  
楽しく取次出来るのは  
親先生のおかげです

御道のために

御道のために身を持って  
仕して下さるおかげです

親先生よありがとう

親先生よありがとう

三、

親教会の初参いり

楽しく御用につけるのは  
御信者さんのおかげです

教会のために

教会のために真心得  
仕して下さるおかげです

御信者さんよありがとう

御信者さんよありがとう

◎信心のかぞえ歌

一、一つとや人々心をいつにして  
いつにして真の心を  
進めよう進めよう

進めよう進めよう

一、二つとや深い御縁と信じなば  
信じなば今でも信じれる  
進めよう進めよう

進めよう進めよう

一、三つとや見栄ははらずに真心を  
真心をおたがひに出し合つて  
進めよう進めよう

進めよう進めよう

一、四つとやよその見る目も睦まじく  
睦まじく苦楽を共に  
進めよう進めよう

進めよう進めよう

一、五つとやいつまでたつてもおたがひに  
おたがひに心を変えずに  
進めよう進めよう

進めよう進めよう

一、六つとや無理は言うまい我をすてて  
我をすててさとりを開いて  
進めよう進めよう

進めよう進めよう

一、七つとや泣き事言うまいぐちをやめ  
ぐちをやめ明るい心で  
進めよう進めよう

一、八つとや病いやけがは心から  
心から心なおして  
進めよう進めよう

一、すべてに御礼の心

一、先代野村トヨ親先生の靈人名

故野村真道豊明姫之靈神（のむらまみちとよあけひめのみたまのかみ）

高知教会、三代、道願正信親先生

御名をつけて下さる

靈の神となられてからも

先代トヨ親先生がお国替えに  
なられ、まだ日もあまり立って  
いない時の事である。

私はある夜十二時頃、子供達  
を休ませて、一人御結界へすわ

一、九つとやこれほど信心したのにと  
したのにと言わないでこれからも  
進めよう進めよう

一、十とやとうとう信心のかいありて  
かいありて我人国家  
皆栄ゆ皆栄ゆ

らせて頂き、トヨ親先生の事を  
いろいろ思わせて頂き、これか  
ら先、土佐高岡教会もどんなに  
なっていくのだからかと、いろ  
いろ考え思いにふけつていと、

私の肩に何か暖かいものが乗せ  
られたような気がしてふと肩を  
見ると、トヨ親先生が手を肩に  
かけて下さり、お元気であられ  
た時のお声で、

「心配する事はない、今までと変わりはない。」とおっしゃって下さり、ハツと私がトヨ親先生だと思い、振り返って見ると、私の眼にもうトヨ親先生のお姿は見えませんでした。

そしてその晩、私が休ませて頂いて夢を見せて頂き、トヨ親先生は、今どこにおられるのだろうかと思わせて頂いていると、トヨ親先生が、「私はどこにも行っておらんよ、いつもお前達の所にいて皆を見

### あとがき

私が土佐高岡教会先代野村トヨ親先生と金光教の信心を通して神様の御神縁により、親子のご縁を頂き、お別れするまでの十八年間の生活させて頂きます内に、トヨ親先生よりいろいろお聞きした事など。

又、私の見せて頂きました事など思い感じさせて頂きました

守って御用させて頂いているから。」とおっしゃって綺麗な花が沢山咲き乱れている所で、信者さんや、私や子供達がトヨ親先生のまわりにいさせて頂いている場面を見せて頂きました。

夢から覚め、私は先代トヨ親先生は、霊の神とられても、いつも私達の所にいて下さってあるのだなあ、とありがたく勿体なく、心丈夫な気がして、それから、私は、ご生前の時のようにどの様なことでもお話しも

事、全部という訳にもいきませんが、私共が今こうして金光教土佐高岡教会で、おかげを頂き、ぼつぼつ乍でも御用させて頂けるといふ事は、先代トヨ親先生のご布教の御苦労があつたればこそで、そのことを思わせて頂きます時、どうしても私が今日までおかげを頂かせて頂きました

させて頂き、困った時はお伺いもさせて頂きますと、ふと耳元でお声が聞こえいろいろ教えて頂いたように思わせて頂き、その様にさせて頂きますと、都合よくおかげを頂き立ち行かせて頂いて今日にやらせて頂いております。

ですから、私は先代トヨ親先生は、いつも私と共に御用して下さつてあるのではないかと思わせて頂き、ありがたく思わせて頂いてるのであります。

たところを、神様、金光様、親先生のこと少しでも後に続く人達に知って頂きたいと思ひ、私いやむにやまれぬ気持ちから、いつも心に念じて居りました所、この度、親子で何とかこの先代野村トヨ親先生の御生涯を本に書き残させて頂く御用をさせて頂くうではないかという事にな

り、私もその原稿を神様、金光様、親先生に、日々御取次御願いさせて頂き乍、私が命の亡き所をお助け頂き今日にならせて頂き、御用にお使い頂いております事の万分の一でもこの御用を通してお礼の気持ちとして現わして頂ければありがたい事だと、一生懸命書かせて頂きました

## 編纂・発行に携わりて

この度、初代野村トヨ師の御生涯を発行するにあたり、この事は後の土佐高岡教会の重要な信心の元、要になる部分であると確信し、資料としても残していかなばならないと思い、野村登茂子師の願われるままに編纂させて頂きました。

教会において、信心をさせて頂くと言うことは、それまでの、教会長、教師の御苦労や、その取り組み方、求め方、教導の仕

た。

神様、金光様、親先生のお守りを頂き、子供も私の願いをわかってくれ、協力してくれまして親子で願い成就のおかげが頂きました事は、本当に有難い勿体ない事であったと、うれしく神様、金光様、先代トヨ親先生のお霊様にお礼を申し上げさせ

方、それらのことを抜きにしては、出来ないことであると思うのであります。

又、どういう方々のお世話になつて、今こうして生かさせて頂くことが出来ておるのか、その一つひとつを、教えて頂くような思いで、この編纂に取り組ませて頂きました。

文中における、内容は、野村登茂子師の手書き原稿を原文のまま使わせて頂き、誤字脱字等

て頂きます。

ありがとうございます。  
厚くお礼を申し上げます。  
協力してくれた清治さんにも感謝します。

ありがとうございました。

平成五年八月九日

野村登茂子

の部分、補足を付けておいた方が、後の者に対して分かりやすいのではないかというところだけを、編纂させて頂き、発行させて頂きました。

この御用に携わらせて頂き、有り難いことでありました。

この本を通して初代から続く信心を生かして頂けますようお願い申し上げます。

平成十三年八月二十六日

野村清治

編纂 一九九一年（平成三年）十月二十二日

発行 一九九三年（平成五年）八月九日（B6版にて初版発行）

改訂 二〇〇一年（平成十三年）八月二十六日（誤字訂正・付記）

改訂 二〇〇四年（平成十六年）十二月十一日（誤字訂正・人名読みを追加）

改訂 二〇一六年（平成二十八年）五月二十六日（B6版へA4版に変更・誤字加筆訂正）

著作者 金光教土佐高岡教会在籍教師 野村登茂子

#### 略歴

昭和三十二年五月 金光教学院入学

昭和三十三年四月 金光教学院卒業

昭和三十四年六月 金光教教師拝命

平成十一年六月 金光教教師褒賞（四十年）

編纂・発行者 金光教土佐高岡教会三代教会長 野村清治



（▲著者・野村登茂子師）

金光教土佐高岡教会蔵書

金光教土佐高岡教会蔵書



(▲野村トヨ師の晩年【遺影】)